女鑑

明治廿七年十月三十日發行

第七十三號

東京國光社

女鑑第七十三號目次

百合子



女鑑

怜悧ならんよりは寧痴鈍なれ

世人は、概、小才あるものを好み、怜悧なる性質を喜ぶもの多し。されど、吾人は、之と、全、反對の意見を抱けり。故に、常に曰はく、人は、怜悧ならんよりは、寧、痴鈍なるべく、敏捷に過ぎんよりは、溫厚に失すべしと。是、亦、女子敎養上に於いて、吾人が、最大要旨とする所なり。

試に思へ。怜悧警敏なるもの、果して、信義あるか。溫厚敦樸なるもの、果して、無情なるか。兩々對比して、沈思默想し去らば、其の、必、相去ることの遠きを知るに足らん。言を巧にし、色を令くするものゝ、仁者鮮きは、古人、既に、之

を言へり。然るを、世人の、常に、質樸なるものを慢るは、最、解し難きことならずや。

人は、小才あればとて、決して、世に益なきのみならず、却りて、其の身をも危くするものなり。佞辯阿諛は、一時を僥倖すべきも、終に、其の交誼を全くし、信用を得ることを得べからず。是、内に、篤實の情なければなり。質樸痴鈍なるもの、固より、機に臨み、變に應ずるの才に乏しと雖、其の信義を重んずるに至りては、彼の輕薄なるものゝ比に非ず。吾人は、最、此の輕薄其の物を惡むこと、甚しきものなり。篤實其のものを愛すること、甚しきものなり。此の愛惡は、吾人の偏私する所に非ず。天下萬世、公正の愛惡なり。滔々たる世人は、却りて、偏私の愛惡を以て、公正の愛惡を非とするもの多し。是、吾人の、全、反

對の地に立つ所以なり。

なにごとものりをこえゆく世の人の心よかたき關もりもがなと、古人の詠み出でつるが如く、善惡の顚倒したる今日の世にありては、輕薄才子の、志を得るは、怪しむべき事よ非ざれども、篤實質樸の風俗、竟に、其の類を絶つに至らんこと、豈、慨痛すべき極ならずや。

婦人の、流俗に陥り易きは、古よりして然り。されば、今の世上、幾千百萬の婦女よして、輕薄の行なからしめんことは、最、至難なり。然れども、吾人は、畢生の力を盡し、徹頭徹尾、之が弊根を芟除して、淳樸靜淑の良俗よ歸せしめんことを期するものなり。是を以て、時に、或は、危言激論をなし、時よ、或は、慨嘆痛憤することあり。矯風正俗の大任を以て、自、任ずるや久しきなり。今や、

又、此の奇僻の說を爲して、以て、諸孃を警策せんとす。諸孃、能く、沈思默想し給はゞ、必、將た、覺然たる所あらんのみ。

論說

德川時代女子教育史評論（八）

岡崎遠光

二、同時代女子教育の要概（下の四）

『工匠往來』といふは、今より、百年以前の著述にて、四民の中なる、工匠の童、女に讀ません爲の書にて、予も、一見せし事ありしが、今は、我が家になければ、委しき事を評論する能はず。依りて、予が先輩の老人に尋ねしも、多くは、見ず、讀まずと答へぬ。されば、他の古書中より、工家の女子に係る事を參照

し、己が觀察をも併せて、一二、茲に掲ぐ可し。
兎角、勞働の業務に從事する家の女子は、習字、讀書、又は、算術等の觀念に乏しく、喧噪雜言、これ樂となし、冷笑放歌、其の、最、得意とする所たり。顧ふに、其の兩親も、性來、高尚なる風習に染みず。卑劣の言、固陋の行をなして、其の女子の模範を作るが爲ならん。されば、固より、女子の學校修行の事は、思ひもよらず。よし、學校に遣りたりとて、十歲以上にもなれば、忽、退校の嚴令を下して、弟や、妹の子守をなさしむ。其の女子たる者が、天禀、學才に富みて、僅少數年の修業に、讀書、習字等に達すと雖、我が家には、勞働の職業に關する道具のみにて、書籍、筆、墨の類なく、朋友は、皆、戶外に出でゝ、子守謠をうたひ、親より貰ひたる小遣錢に、腹を太らせつゝあれば、己も、終に

は、子守謠の調子に浮されて、遊の面白味を覺え、さては、無敎育の人間となり了るものなり。年長けて、嫁入せんにも、幼き時、放恣に育ちし身なれば、七去、三從の御法は守れず。五倫五常の觀念もなければ、姑と爭ひては、夫の家を去り、夫の貧なるを見ても、己は、隣家の朋輩と、雜談に、日を暮し、下等なる快樂を、五十年間、貪りて、此の世を消了するが、職工社會婦女子の常態なり。是、全、其の敎育の然らしむる所にして、敎育家の一顧せさる可からざる所とす。西曆一千八百六十四年、西人某が、工女の學問を調査したりしに、三百八十四人の工女の中、讀書と、習字と、算術との三科に通せる者は、僅二十四人、讀書と、習字との二科に達せる者は、五十六人。單に、讀書のみを覺えたるは、三十六人。而して、太多數二百六十八人は、全、新訓「わきめもち」の類

なる婦女子にてありしとぞ。かゝる有様は、女子其の人の罪か。父母其の人の罪か。予は、唯、十九世紀の文明に、明盲婦女子の多數なるに驚くのみ。

一千八百六十四年の文明國に於いてすら、既に、かゝる有様なれば、之より推して、我が國封建時代工匠社會の女子教育を考察する時は、果して、如何なりしかを、略、想像し得らる可し。即、前の三百八十四人の中、必『あきめくら』の女、三百以上は、指の數に加はりしならん。尤、我が國は、外國と異なりて、女文字といはるゝ平假名、及、片假名の如き、容易なる文字もありて、自然、言文一致樣の手紙を書き、赤本樣の書を讀み得る者は、下等社會にも、隨分、多ければ、德川時代の大工、左官の妻、妹も、鼠雙紙の簡單なる面白味を甞め、兒雷也物語の虚幻なる所作に樂しみしには相違なし。されば、又、案外に、讀書丈の

力は備へし者も多かりしならんか。尙、家庭の敎育もなく、朋輩の誘掖もなく、文字の知識もなき人、手短に言はゞ、今の『女子職業學校』にも入らざりし、全、文盲の婦女子にても、夫が、斧、鋸を打ち振りて得たる賃銀を、適當に消費し、有益に使用し、舅姑に、能く事へ、妹、女を、叮嚀に導き、家をおこし、名をあげ、永く、世の模範となれる者が、封建時代に、數多かりしは、書籍に散見して、歷々たり。予は、工匠社會なる婦女子の職務は、實に、茲に在りと信ず。『女實語敎』が敎ふる處を見よ。『たとひ、綿をひき、苧をうむとも、忠孝の志を忘るべからず。又、物を縫ひ、糸をつむぐとも、心に、節義を守るべし』とあるを、能く見よ。維新前の女子敎育を支配せし、此の書は、工女に向ひて、修身の道を勸めし事、此の如し。更に、又『鄭氏女孝經圖會』のいふ詞を聽け。『毛詩

瞻仰の篇に、『婦無二公事一。休二其蠶織一。といへり』とあるを、謹みて聽け。即、女たる者は、社會の公事に奔走幹旋せんよりは、家内に在りて、家の爲、夫の爲、蠶業、裁縫等をせよ。又、蠶業、裁縫等にては、女の身として、滿足のものにあらねば、ゆめ〳〵、忠孝の志、節義の心を忘るべからず。これにて、婦人の責任を完うすべしとは、今日とても、さあるべき次第なり。かく、修身齊家の道は、懇切に敎へしかど、昔は、今よりも、讀書、習字、算術等に暗きやう、敎育せしは、いづこも同じ秋の夕暮、憐むべきかな。

然るに、加賀千代女は、さすが、才學に富みたる女丈夫なりしゆゑ、工商社會の婦女子の爲に、敎へて曰はく、「工商の妻となり、女たる者は、稼は、夫に任せ、内を治むる事、肝要なり。物かき、縫針の心がけは、定まりたる事、間ある時

は、算數も覺ゆ可し』と。されど、此の教訓の如く、滿足に仕上げし女は、いと少かりしは、惜む可し。明治の御代にても、讀書、算術、其の他、科學に明るき女子は、蠶業、裁縫の事、兎角、暗く、又、蠶業、裁縫に通ぜる婦人は、讀書、算術等を知らざる弊あり。此の處、父母長上の、躾方、最、肝要の處。注意あらまほしき事にこそ。

さて、昔、俗間に行はれし一書に、裁縫の事に從事せる工女が、急ぎ物をたつ時、『唐國のあらきゑびすの衣なれば時をも日をも嫌はざりけり』と唱ふる時は、先、其の着物にも、人にも、吉運まはり來るべしと記せり。果して、かくの如きものとせば、婦人の部屋には、此の歌の額を掲ぐべきか。あらず。文明の國には、別段、かゝる事に、重をおかねば、更に、此の歌を、朝鮮の官奴、賤女に

傳へて、彼等が、弱き事、女の如き支那兵の軍服をたちぬはん時、之を唱へさせては、如何や、如何。

女子教育に就きて（三）

山崎庚午

女子の家庭教育に就きての父母の心得

女子と、家庭教育との離るべからざる、既に、上論せるが如し。然るに、現今の有様、父母が、其の兒女に對する家庭教育の方法、少しも立たざるのみならず、甚しきに至りては、却りて、兒女の惡風を發揚せしむるが如き觀あり。寔に慨嘆の極なり。人、或は曰はく、現今の父母、一般に、頑愚迷妄にして、兒女の教育を爲すに足らずと。然れども、世の父母たるもの、已、自、先、賢明方正の實

を具へて、而して後、其の兒女を敎化訓導し、後來、よく、全智全聖の人たらしめんことは、實際上、到底、能はざるべきことなるも、其の兒女に向ひて、可成的、完全の敎育を施し、且、普通、一般の禮義作法を辨へしめんことは、如何なる父母とても、免るべからざるの責任なり。殊に、父母は、少なくとも、兒女の敎育上に、防害を及ぼすべき事物は、之を遠ざくるの道を講じ、以て、敎育の實効を望まざるべからず。卽、兒女の心性上に、惡風を及ぼす事物の如きは、斷じて、之を、兒女に近づかざらしめんを要するなり。吁、孰か、其の兒を愛せざらん。愛して、而して、敎育せずは、是、禽獸と、伍を爲すものなり。理に反く、蓋、是より甚しきはなし。

中流以下の家庭に於いては、女子の年齡、なほ、少き頃より、之に向ひて、三絃

を教へ、唄歌を習はしむるもの多し。其の弊害や、實に、大なり。彼の、淫聲、聞くに忍びざるものをして、聲高らかに、公衆の前に誦讀して、自も、得々然、揚色あるが如く、況、其の父母の如きは、兒女に、此の淫聲を學ばしむるを以て、却りて、他人に誇らんとするが如し。何ぞ、それ、誤れることの甚しきや。抑、女子の性質たる、極めて、外物に感染し易し。然るに、いま、卑猥、斯の如きものを擧げて、之を誦吟せしむ、其の結果や、遂に、女子の性情をして、卑猥、いふに堪へざるに至らしむるのみ。詩人、詩聖堂、句あり。曰はく、風飄意海春波亂。雨捲心雲秋月陰。と、寛齋先生も、亦、句あり。曰はく、君不見魯國君相受女樂。宣尼拂衣去不還。何使陰陽燮理權。移在女兒手口間。と。蓋、みな、風俗を壞るを傷めるなり。吁、この淫聲、その人心を陷溺する、留

注意して、斯る淫聲は、なるべく、之を、兒女の耳に觸れざらしめんことを要す。然るに、今は、却りて、之を以て、誇らんとす。何ぞ、誤れることの甚しきや。又、これ而已ならず、兒女を愛する父母にして、兒女の意を慰め、心を樂しましめんとて、或は、之を、寄席に誘ひ、或は、之を、演劇場に伴ふものあり。卑人、賤物の雜居混列のうち、善事物の、目に入り、耳に觸ることと、難かるべく、殊に、今の寄席、演劇場の如き、徒に、下等卑猥の事を演じて、以て、衆人に見聞せしむるを以て、常とすれは、其の塲に入りて、高尙の感情を起こすことなきは勿論、却りて、卑猥の心情を起こすに至ることあり。女子の如き、感情に強きものをして、此の塲に入らしむ、固より、其の可なるを知らざるなり。

女子處世論（十一）

三輪田眞佐子

第九　行爲の標準を定むべし

凡、人たるもの、天地の間に、生をたもつ限は、つかのまも、行ふべきこと、爲すべき業の止むときはなかるべし。故に、もし、この世に處するもの、苟、行爲の標準なからんか。迷なき能はじ。人品の模範なからむか。誤なき能はじ。しかるに、女子は、殊に、外は、親戚の親睦を計り、他人の歸服を得、内は、父母舅姑を安んじ、兄弟姉妹を和げ、且、良人に事ふるなど、總て、義理人情の樞局を主るべきものなり。故に、一擧一動も、確乎たる標準なくば、恒に、狐疑逡巡して、事を執り得ざるは勿論、遂に、之がため、思を焦し、身を勞しながら、反り

て、袖を濕すこと絕えざらん。

今、一言に、行爲の標準を約すれば、至善に從ふべしと云ふに過ぎず。されど、之を實踐せんこと、いと難ければにや、昔より、有德の人は、當時の君子を撰び、あるは、往時の聖賢を慕ひて、各、意中の師を作るなど、至善に離れまじと工夫せざるものぞなかりし。故に、能く、身を、世に處せんと願ふ女子は、行爲の標準を、至善に取ると同時に、史上に於いて、至善を守りし好人物を慕ひて、意中の師を作り、亦は、方今に於いて、有德の先輩、および、善良の同伴を得て、行爲を摸擬すべき標準となさでやはあるべき。然るに、現今の敎育は、多能の人を師として、末技を先にし、なかも、自分の標準となるべき精神の良師を撰ぶことを知らざるものゝ如し。もし、茲に留意せざる女子あらば、終を善く

せんこと、難いかな。
そのかみ、才媛輩出の時代として知られたる頃を、今より想像せば、その當時は、いと、女敎も盛なりけんと思はるれども、誠に、考一考せば、その時代はど、女敎の行はれざりし時は、史上に希なりき。そが理由は、敎育の主眼なる精神の標準、絶えて定まらざりければなり。見よ、和泉式部日記は、如何なるものなるか。そは、敦道親王が、式部の許へ通ひ給ひしことの始末を、自書きしものならずや。されど、その文章は、わきて、めでたしとぞ。蜻蛉日記は、如何なるものなるか。そは、攝政藤原兼家室が、はじめ、兼家と、私に知りそめ、遂に、道綱を生みて後、公の夫婦となりしまでの顚末を、自綴りしものにあらずや。されど、その文體、いと、めづらしとぞ。今日、之を讀む女子は、愛情の學

間として見るか。はた、文章の秀拔なるがためなるか。あはれ、斯る筆力を轉して、何ぞ、名教を垂れざる。否々、それこそ、章句の末技に巧なりしも、精神に、美德の具はらざりし證表なれ。されはにや、當時の女子にして、終を能くせしもの、少かりき。古事談に、淸少納言、零落の後、若き殿上人、打ちつれ、彼の宅前を過ぎ、その家屋の破壞しにけるを見て、さすがの少納言も、無下にこそなりけれと語らふを、聞きたりけん、少納言、忽ち窓の簾を捲きあげ、やつれたる顏さし出し、誰か、駿馬の骨を買ひ給はざるかと言ひき云々と見ゆ。蓋、彼の俊才をもて、能く、行爲の標準さへ定まりたらむには、焉ぞ、香爐峯の雪、想ふに如何との御言を聞き奉り、逸早く立ちて、御簾を褰げしその手をもて、さまで、苔むす庵の破れし簾を、亦、撥きあげんや。之を思へば、何人も、感慨の

情を起さゞるものなかるべし。精神の修養を怠り、行爲の標準を定めで、あたら人生の幸不幸を、偶然とのみ思ふは、誤ならんかし。

元來、女子の、無分別として、擯斥せらるゝ所以のものは、進みて、業を爲し、退きて、事を守るなど、一切の行爲に、確乎たる標準なきを以て、國に、大事あるも、その原因結果を識る能はず。反りて、身に、些事あれば、禍を轉じて、福となす道を思はで、周章狼狽する如きことのみ多ければなり。換言すれば、女子には、泣くべからざる時に、大に泣き、笑ふべからざる時に、大に笑ふ如き弱點あり。さればにや、女子の、柔弱なるものは、世の奴隷となり、翫弄となり、蠢蠢然として、生涯を遂げ、剛愎なるものは、中將姫の繼母となり、妲姫、もしくは、褒姒となり、害毒を流布して止むめり。是、全、行爲の標準なきに由るも

のならん。もし、果して、標準定まらんか。たとひ、颯々たる秋風誘はむも、その操は變へざるべし。昔日、衛の莊公の夫人に、莊姜といふ人ありけり。わきて、德高く、才秀で、且、身分も貴かりけるをもて、夫より、頗、敬愛せらるべきに、固、夫は、無道の君なりければ、反りて、痛く、その有德なることを嫉ひけり。かの紫式部の、世の人情をくみて、葵の上のことを表しけるも、理ぞかし。されども、莊姜は、手は、柔荑の如く、膚は、凝脂の如く、領は、蝤蠐の如く、齒は、瓠犀の如く、螓首蛾眉、巧笑倩たり、美目盼たりと言ふほどの美人なりければ、一朝、夫の無道に與みせんには、こよなき寵遇を得べかりしに、彼には、行爲の標準ありけん、內は、德を積み、善を養ひ、外は、錦を衣て、褧を加へ、もて、その文の著るゝをさへ厭ひたりき。あはれ、かれ、そがため、無

道の夫には愛せられざりしかど、衞の人、ために、碩人の賦を作りて、之を憐み、後世、その德を賞揚して止まざる所以のものは、至善に安んずる行爲の標準ありし報にこそありけれ。今日、單に、章句の學をなし、揚々として、不遜の行あるものは、豈、芳名を、竹帛に垂れ得んや。芳名を、竹帛に垂るゝほどの女子にあらざれば、何ぞ、能く、身を處せしものと言ふに足らんや。以上は、過ぎし六日、府立なる高等女學校卒業生のために說話せしものゝ一部分なれど、精神上の良師を求むることを顧みず、從ひて、行爲の標準を定むるもの少き今の風潮に、身を處せん女子には、必要ならむと信ずるをもて、茲に揭げつ。

史談

百合子

大町芳衛

東山の地、萬樹の櫻花朝日に匂ひて、春の錦を織りなせど、其の麓なる葛原の里には、未だ酒館もなくて、今の如くは賑はざりしほど、玆に穀子といふ女ありけり。祇園の祠の側に茶店をしつらひ、参詣の人に茶菓を賣りて生活をいとなみけるが、心ざま優美にして世の塵にけがれず、行正しく、歌にも堪能なりければ、其の歌集なる穀葉集といふ書さへ世に傳はりて、いたうもてはやされぬ。其の養女に、百合子といふものあり。母に倣ひて、深く敷島の道にわけ入り、花の朝、月の夕、心にうかび、胸に思ふことをつゞけて、秀れたる歌ども少からず、身は八重葎しげれる野末の伏屋にあれど、心は花よりも麗しく、其の母と共に、才名雲の上までも聞え、殊に冷泉中納言の君の恩遇を被り、しば／＼其の家に召し出されて、賤の女には此の上もなき面目を施しけるは、ひとへに和歌の徳なりけり。

百合子は其の性質さとく、裁縫糸竹の技など、一たび人の爲す所を見れど、直にさ

とりて、師匠に就かざれど、その妙を極めずといふことなく、母の歌よむを見習ひて、幼き時より三十一文字をならべ、長じては益之をたしみ、身に閑あれど、片時もあだに過さず、紙を展へ、筆を手にして、情を述べ、景を寫し、錦なす腸をしぼりて、咳唾、玉となり、心も姿もけだかくして誦すべきうた、いと多く、顔形さへ人にすぐれてうるはしく、東山の花に一しほの色をそへて、天つをとめの天降りたるかと、思はるゝばかりの美人なるに、其の心は其の形よりも更にうるはしく、優にやさしくして高家の姫君にも劣らず、質素を好みて身の廻りをかざらず、白粉をつけざれど、天のなせる麗質は反りてあはれ深く、しなやかなる姿自から人を動かしけり。かく、其の姿と云ひ、其の心ばへと云ひ、其の歌と云ひ、人にすぐれてめでたかりければ、殿上人の若君、富家の子弟など、招く尾花にひかされて、葛原の野末にあくがれ、誘ふ水の思深ければ、梢の花の散る風情なきに心まどひ、つれなき人と知りつゝも、猶、忘れがたくて、葦鴨の打むれて來る人々店にあまり、切なる思をかきつらねたる水莖の跡の數々机の上よりかさなれど、百合子の心、石にあらざれど、轉どすべくもあらず、席にあらざれど、捲くべくもあらず、青柳の枝どかかり

は風の情になびけど、こかすがよ、雪の力には折れざりけり。其百合子の夫とかしづきし人は、かゝる浮きたる思を寄する人にはあらざりけり。其の人は貧しかりけり。位も祿もなかりけり。されど、其の心はすぐれて、たふとかりけり。其の人姓を德山と云ふ。名は傳はらず。幕府の旗本の子なれど、事によりて京都にさすらひ人となりて、落魄いふばかりもなけれど、其の心けだかくして、世の常の人に似ざれど、百合子の慧眼はやくも池中の物にあらずとさとりけむ。高貴富豪の家にかしづくを得べき身ながら、心柄のよき人を擇びて、百合子は實に一窓浪人の妻となりしなり。

雲井をかけるべき龍の未だ雲を得ずして、淵の底に潜める德山の身の上をあはれみ、衣は自から縫うてこれに着せ、骨身を惜まず働きて、德山の用ゆるもの、なにくれと無く贈るほどに、德山は生活に不自由を感せず、いたう百合子の心正しく、情厚きを喜びて、妹脊の契いとゞかたきに、町子と呼ぶ女の子さへ生れ出でゝ、情誼ますゝゝ濃かなりけり。かくて、數年を過しけるが、德山方の本家の跡絶えたれど、親族一同相議して、德山に其の跡をつがしめむとて、迎の者を送ることゝはなりぬ。德

山は栖み難くて、江戸に下らむとして、年頃契りし百合子をも伴はむとて、其の由を語りけるに、百合子いなみて云ひけるは、年頃惜からざりし命さへ、長くもがなと思ひて、かしづきまゐらせしに、今はからずゝ、東の空に下り給ふことゝなりて、いとゞ名殘惜しく思ひ侍れど、御身はこのたび、御本家の跡をつがせて、故郷の空に錦をかざり給ふことなれど、妾の如き賤の女を伴ひ給はゞ、人に後指さゝれ給はむと云ひけれど、われ此地にさすらひ人となりて、幾度も飢餓に迫りしを、御身の情によりて今日あるを得たり。其の恩、其の情、死すとも忘るべからず。御身を棄てゝわれ獨り榮華を貪るとも何かせむ。かゝる心づかひは止めて、我と共に東に下らずやといふ。されど、百合子はなほ固くいなみて云ひけるは、かくまで深き情の言葉の露をかけ給ふものを、いなみまゐらするはいと畏けれども、妾の心をも汲みてたべ。御身は格高く祿重き本家を嗣ぎ給へど、配遇もまたふさはしき家より迎へ給ふべきなり。妾は氏も素姓もなき賤の女なるに、徒らに年頃の恩情にひかされて御身を離れずば、御身の耻辱となるのみならず、祖先をも辱かしめむ。かく御身をはづかしめ、家をはづかしめては、たとひ、昔にかはらぬ恩情を被るとも、妾の心

はいかで樂しからむ。よしや、妾を憐みて側室となし給ふとも、妻妾相和せずして、家内の風波の絶えざるは、世のならはしなれば、御身を累はすこともやあらむとて、妾の心は反りて安からず。とにもかくにも、御身とは添ひ遂げらるべくもあらぬ身の上なり。年頃の恩情を全うするには、今日別れまゐらするより外にすべもなし。さらで江戸に歸りて家を興し、名を擧げて、千代までも恙なくおはしませ。妾は一生御身と別れまゐらすべけれど、妾のことをば、思ひ切りて、心にな掛け給ひそと、理をつくして云ひければ、徳山もまた強ふるに由なく、さらば、御身の言葉に從ふべけれど、せめて、町子は伴うて歸り、御身と思ひて養ひそだてむといふ。百合またこれをも否みて云ひけるは、御身は年猶若くおはせば、新に奥方を迎へ給ひて、子寶のなきを憂ひ給はざれど、妾は御身と別れては、重きが上の小夜衣、我つまならぬつまを重ぬる心は露ほどもなく、父もなく、母もなく、杜とも杖とも賴みて、死水をも取らすべきものは、唯此の町子のみにて、まのあたり君を見る思ひしてなぐさむよすがも有らむに、此の娘をも伴ひ給はゞ、妾は何をたのみてか此の世を渡るべき、御身とても、娘を伴ひ給ひては、人に後指さゝるゝこそ、妾を伴ひ給ふに異

ならざるべければ、枉げて妾の心にまかさせ給へといふに、徳山また強ふるに言葉なく、分別よき女かなと、感歎しつゝ、涙を抑へて立別れけり。鸞離れ、鳳別れて、孤閨夢冷やかなる百合子の心の中、如何にかなしかりけむ。されど、百合子は夫の身の上を思ふあまり、我身を顧みずして、ひとへに夫の爲めを圖れり。十年の久しきをちぎりあひて、夫の貧窮を拯ひたる恩さへあるに、夫の爲めによろしからずと悟りて、いさぎよく思ひ切りて、一生孤燈を守らむとするは、賤の女には有り難きことにして、其の心掛けの殊勝なるは感ずるに餘りあることなり。

かくて、百合子既に夫と別れて、町子と唯二人相依りて、細き烟を立てながらも、固く操を守り、行を正しくして、十年も一日の如く、町子には何くれとなく敎へて、其の生長を樂しみけるほどに、町子長じて才情ありければ、百合子いたく喜び、ふさはしき人を聟にせむとて、心をとめて尋ねけるが、其頃、同じ葛原の里に、池野秋平と呼ぶ醫師ありけり。其の壽世に賣れずしていと貧窮を極め、家は月のもるに任かせ、身には襤褸を纏ひて見る影もなく、里人皆侮りて嘲り笑ひけるを、百合子は其の繪を看、其の言行に接して、世の常の人にあらず。必ず名をなすものならむと

思ひければ、此の人を迎へて、町子にめあはせけるに、果して其の先見にたがはず、和漢の書を學びつくして、自から新機軸を出して、其の名海内にとゞろき、大雅先生と云へば、三尺の童子も知らざるものなきに至れり。

池野大雅は霞樵、九霞山樵、竹居、兎滸釣叟、三岳道者等の號あり。其の書は和漢をかね、山水、人物、花鳥皆妙を極め、頗奇韻ありて、粗書密畫共に雅致を含みて、優に一家をなせる偉人なり。其の言行も人にすぐれて、後世に傳はれるもの多し。町子も亦書法を其の夫及び柳澤里恭に學びて山水をよくし、殊に蘭竹梅菊に長じ、號を玉瀾と稱して、夫、大雅と共に世にたゝへられたり。町子、夫を迎へてより、夫妻終日、一室にこもりて畫をかくことに餘念なく、時に夫に酒を侑め、自から琴をかなで、其の心をなぐさめ、夫と共に道を樂みて家の貧なるを憂へず、米櫃しばしばも空しく、釜に塵つもれども累となさず、心一に夫にうやまひかしづけば、大雅もめでいつくしみて、柱いがみ、屋根傾ける家の中に、和氣常に溢れければ、百合子の喜び言はん方なく、我が望足れり。また、世の中に思ひ殘す事なしと云ひけるとぞ。あはれ、娘をば富貴の人にめあはせむとするは、大方の親たるものゝ常なるに、

かく道を樂しめる貧士の妻となしたるは、げに、殊勝なる心ばへなり。百合子の人となりのすぐれて見識高きは更にも言はず、女の道を守りて終始貞節を守りたるは、婦人の龜鑑とするに足る事なるに、人を知るの明さへありて、世の人の嘲笑せる大雅を見拔きたるは、類稀なる賢女といふべし。

玉瀾、大雅の妻となりてより五六年たつほどに、百合子は病にかゝりて、眠るが如く世を去りぬ。後、數十年立ちて、或日、一人の侍來りけるが、折しも大雅は不在なりければ、玉瀾門に出でゝ其の來意を問ひけるに、侍は玉瀾をつく〴〵と見て、御身は池野ぬしの夫人にあらずや。我は德山某の子にて、夫人とは同父異母の兄弟なり。年來御身を尋ねむと思ひしに、このたび、幸にも主命によりて此地に參り、恙なき御姿に接し、年來の望達して、うれしさ此上もなし。願くはこれより互に往來して、長く親戚のよしみを通ぜむと云ければ、玉瀾答へて云ひけるは、此の事はおのれも亡母より聞き侍りぬ。されど、母は謹みてよしみを通ずることなかれと誡め給へり。今、圖らずも、血筋を分けたる同胞に逢ひ、かゝる厚意をうけて、うれしさは言ふばかりもなけれど、母の遺命は違ふべくもあらねば、あしからず思ひてよ

と、聲もうるみて聞えけるに、侍も致し方なくして立ち去りたりといふ。あはれ、同胞に逢ひながら、一杯の茶だにもてなすことも能はずして別れたるは、如何に悲しきことの限りなりけむ。されど、母死して數十年も經たるに、なほよく其の遺言を守りたる心のほど、げに、欽慕すべき孝女なりけり。

玉蘭は、姿は母に劣りて美しからねど、心は母の氣をうけて、しとやかに、才情も母に似て、いたく歌を好み、冷泉家の門に入りて修業をつみ、遂に其の妙を極むるに至れり。始め其の門に入りし時、舘の女房ども、其の姿必ずうるはしからむとて、竊にかいまみしに、木綿の洗衣を着し、手に魚籃を提げて、風貌甚だ粗なりけれど、皆大に驚けりといふ。これにても、玉蘭が外幅をかざらずして、心一つを磨きたることを知るべきなり。

かく、數子と云ひ、百合子といひ、町子と云ひ、皆絶世の才女にして、三世相つぎたるは奇といふべし。心同じやうに麗しかりしも奇にして、共に歌にすぐれしも益奇なり。そも、東山秀靈の氣、化して此才女を出せるよや。我日本國の女子は、栞を寶るものに至るまでも、心はかくたふとかりけり。あはれ、物移り、星かはりて、佳

人の香骨も今は黄土に歸しぬ。東山の下、葛原の里、百合子をもとめむと欲してまた得べからず。唯山上の花、舊に依つて麗はしきを見るばかりなり。

只野綾女

香湖女史

只野綾女は、近世の才女なり。其の祖先は、播磨野口の城主なりしが、子孫、故ありて零落し、大坂に流寓して、後、江戸に漂ひぬ。其の父平助、諱を平といへり。仙臺侯の醫師工藤家を嗣ぎけるが、性、凡ならず。居常、圓頂長袖の身たる事を耻ぢ、常に、蘭學を研究して、發明する事も、多かりき。想ふに、祖先の功業を追想して、當時の俗醫師たるを屑しとせず。其の家聲を回復せむ事に熱心せしならむ。眞葛は、其の長女なり。弟二人、妹四人、何れも、尋常ならずして、或は、詩を能くするあり。或は、歌に巧みなるあり。或は、家藝に長けたるなどありしが、多くは、世を早うして、唯、二人のみ殘れり。眞葛と、荻の尼と、是れなり。さて、綾女、名を、何故に、眞葛と名けしぞ、といふに、『葛をなは、愛づるばかりのものならねども、禁の廣けれども、兄弟をさしおはふ、子の上にしも似つかはし。』といふ意よりの名なり

とか聞く、以て、幼き時より、人に超絶せる、才氣ありしを知る可し。

綾女、甫めて十歳、明和末年の大火に逢ひし時、物價の騰貴して、細民、大に窮し、食を乞ふ者、道に絡繹たるを見、且、機に乘じて、商估の巨利を博するを嘆き、是れより、身、自、學を修め、德を行ひ、世人の模範となりて、愛世利民の事業を起さむ、と志しぬ。之れを爲さむには、先、漢學を修むるに如かじ、と思ひ、日夜、斯の道に勵精せしに、父も、當時の敎育主義に感染せしかバ、婦女子の才ぶるは、惡き事なりとて、唯、我が國の草紙のみを見よ、といひしかバ、己むを得ず、源氏、伊勢の類を讀みぬ。十六歳、初めて、和文を綴りて、村田春海翁の校正を乞ひしに、師なくして、此の如し、後世、恐る可し、と褒められしとぞ。其の次の年、仙臺公の御前に仕へ、後、仙臺の藩士にて、江戸勤番を勤めし、只野伊賀の後妻とありぬ。時に年三十六。斯く、年老いて後、結婚せしは、仙臺公より、暇を給はりてより、我が家に在りしが、母失せて、妹等の、尙、幼稚なるを後見せん爲、あたら日を過しし故なり。又、遠く、仙臺の藩士に、結婚せしは、父の遺言に基けるなりけり。其の後、良人、世を去り、兄弟も、多く、此の世に亡くなり、只野家は、繼子の世

となりて、綾女の心、無常をかこつやうなりぬ。此の折、凡人ならで、尼法師ともなりけむを、雄々しき綾女は、却りて、志操、愈、堅く、見識、益、高く、文化十四年の冬、十二月といふ時、年五十五にして、獨考といふ書を著はしぬ。諸侯方經濟の可否を評論して、寵臣、嬖妾の害を言ふ。蓋、巾幗社會、希に見る所。此の外に、奥州むなし一卷、磯つたひ一卷、昔がたり、とはずがたり、秋の七草、筆の運び等あり。是等は、史談、紀行、隨筆、草紙の類にして、其の文、自、一見識あり。中にも、磯つたひ一卷、最、勝りて見ゆ。

綾女は、性質、頗、男子の風あり。されど、人に對して、往々、尊大の風ありしかど、又、量器、人に超え、他の忠告を、能く容れて、遜讓、身を持たむ事を欲したり。妹の萩の尼も、世に珍しき才女にて、和歌、和文、其の姉に劣らざりき。手跡は、姉妹、共に瀧本樣を習ひ、筆勢、頗、趣あり。兩人共、馬琴と、書簡を往復し、獨考には、馬琴の評論にかゝれる、獨考論さへあり。又、馬琴が、眞葛を評せる文に、綾女は、漢字、和字に通せるのみならず、更に、佛の道も、略、曉りて、觀音、不動尊を深く信せり、と記せるを觀るに、蓋、老いて後、身の、心に適はぬを憤りて、

斯くは、信仰の念を起しゝものか。然れども、予は、綾女の剛膽、決して、浮屠氏の爲に、惑はされざりしを信ず。

されば、嘗て、大膽にも、國學者の大家、眞淵、春海、宣長、太平等の諸翁をも評論して、馬琴と問答したりといふ。馬琴が、婦女の弟子をば、決して、肯はざりしに、獨、眞葛を、紫女、淸氏以上の人物とおもひて、其の著述を點校せしも、故なきにあらずかし。文政七年に沒す。年六十二。

漫録

あらずもかな（第十）

鹽井雨江

（二十一）女子は、とかくに、言葉を飾り、色をつくる事のみするが多かれど、汚く醜くあらずもかななり。人は赤心にあり。わきても、女子は然り。心情だに、うつくしくやさしくあらば、誠の女子ならむ。人にものいふ言葉、人にうちむかふ色は、唯に淸くすゞしくだにあらば、よかり。さては、あやあくとも、つくらずとも、何時の世、何處、誰にか恥ぢん。

おのれ、去年の夏、京都に遊びぬ。家を出でつる時、父母も兄弟も、共に、西京は山光水色の土地、さはいへ、我子行くとも、我兄遊ぶとも、必ず吾妻の里、故郷の軒は、忘なせそといはれぬ。おのれ、唯々といらへながらも、行く時のいかにうれしく、去る時のいかに悲しからむなど思ひつゝ、下りて見れば、山も美なり、水も佳なり、神社も幽なり、殿堂も雅なりけり。されど、住める人は、如何に。女子は、皆美服華装をこらし、玉簪花釵をつくり、ものいふ時は、春鳥の花にさへづる如く、なん〳〵たる嬌聲巧みに、うちむかふ時は、柳枝の風に靡くがごとく、頻りに頭を低げ、腰を折め、と見れど、禮に富み、義に厚く、あくまで心情の深く細やかなる如く見ゆ。されど、そは皆必竟、巧言令色たるのみ。淺澤沼の淺き情は、宛かも泥の如く汚く、又氷の如く冷かなり。其の言語に面色に、美しげなるけぶりを飾るは、其の内心の汚きを掩はむが爲めのみ。其の言語に面色に、温厚柔和を粧ひたるは、必竟、其の心情の冷々薄々たるを隠さむが爲めに爲すのみ。思ふにつけ、見るにつけ、きくにつけ、あさましき事のみ多く成りぬれど、山河の美なるも、我心を悅ばしむる方なく、風光の優なるも、我袖を引き留むるの力なく、居る事僅に五日、袂を拂ひて出で、歩行より吾妻へ歸らむとせり。

ゆき〳〵て、駿河なる田子の浦ちかき山路にうちかゝりたるは、ふみ月廿日ばかりの眞晝時。日の光りは、大空の限り、ほのふとなりてもゆるがご

とく、大地も混沌たるものに溶け、草木も灰と成りやせむかと、おぼゆるばかりの勢もて、照り輝けど、菅の小笠などの、遮ぎるべきやうもあらず。見わたせど、頼むべきほどの木の下蔭も見えず、立ちよりて、むすぶべき清水のたよりといふものも無ければ、苦しさはいふばかりあらず、あなかくてぞ玉の緒の絶えやすると思へば、心細さは、げに糸なりけり。

わが身ありといはむか、無しといはむか、われに問へどわれあらず、唯、いふべき方なく、おぼつかなくも、たど〳〵と、たどりたる時は、翼なき鳥、つめなき駒、萬物の靈も、遂にはかなきものの限りなりと、思ひさとるも、あはれなりけり。

われながら、力も叶はず、うち見わたる折ふし、里の少女の、田草ひきてかへるならむ、身には、あらがねの地染めといはむずる衣を着たれど、年齢は二七ばかり、やさしげなる農家の女、さゝやかなる桶の、いとふるく、朽木づくりの色したるを携へたるにあひぬ。此處わたりに、清き水や候、教へ給へといひければ、山の彼方にありといふ。

ありとはきゝて、山の彼方なるに、唯、うち見あげて、嘆息すれば、少女は、我窶れたる姿の、あまりにあはれにやおぼえけむ、手なる桶を示して、此も、おなじ岩根に酌みつる水、これにてよくば、飲みねといふ。よろこびて、のみぬ。桶のはたは、朽ちたれば、水と共に、粉となりて、喉にも入りつらむ、桶の中にも、塵となりて浮びたり。ひたのみに飲みて、餘れるに面拭ひなどするに、勞れも

棄れも、とがたにか流しやりたらむやう、心地すが〱しく、、雄氣も、とみにかへりて、氣も心も、新になりぬれど、少女にうちむかひ、われおん身の恩に、手足健かに成りぬる事のうれしさ。せめては、岩根より酌み來て、かへしまつらむ。去ばしまたれよといへば、少女は微笑みて、やうなの事や、など、旅人に、水をも返へし求むるたわけやある。をこやといひざま、もと來たりたる山路の方へ、引きかへしゆきぬ。あまりに氣なげなる人の心の、名殘りをしくて、幾度か山路の方をうちあふげど、少女も、二度、三度、わが方を見かへる姿、見ゑぬ。げに、言葉は、露ばかりつくらず、色をも、更によそはねど、一桶の清水、すゞしくもやさしき心の雫は、くめどもつきせず。人は皆斯くこそありたけれど、身にしみておぼえたれば、吾妻にかへりて後も、父母に物語り、妹にも示去て、めづらしきものにいひはやし、その名尋ねずて來しを、今もくやしく思ふなり。

あはれ京の都の女子、此の山里の少女、一は錦紗に包める瓦石、一はあらたへの布の嚢に納めたる寶玉。一は、あらずもがなの限り。一は、いりたきものゝはてなり。いづれをいはずとも、心ある女子むらは、知りつらむ。知らぬといふ女子あらむ、そも、又あらずもがな。

才女逸話（四）

山崎庚午

卑賤の者にも、高き思想を認め、高貴の人にも、賤劣の心情をやどすなり。茲には、卑賤才女の逸話を掲げぬ。若し人、その生業の如何によらずして、その心情の如何を知らんとせば、一讀、又、益なしとせず。

十三、卑女の文學

茲に、錄せんとするは、卑女の文學にして、そのうち、殊に、遊女のなり。遊女界中、三人の文傑ありき。雲井、歌川、大橋とす。才識、高く、情想、清きこと、殆くばかりにて、身は、賤業のうちに沈淪すと雖、その心情、雪よりも、白く、月よりも、清く、花よりも、美なり。殊に、その文才に至りては、卓越、意の外にあり。古へは、賤業者のうちにさへ、斯るものもありけるよ。願ふに、今の世、これに對して、愧ぢざるの女子、それ、幾人かある、吁。

卑女界の文傑は、雲井、歌川、大橋、なるべし。雲井は、芳原の遊女なり、資性、高尚にして、態度、おのづから、泥中蓮の趣あり。俳諧を好みて、素外の弟子となり、書は、佐々木文山の後を慕ひて、殊に、妙なり、文に至つては、非常に、婉麗ならざるも、筆、縱横に奔馳す、つゞりしもの、數多、あるも、そのうち、最、優れたるは、「たもとの枝折」なり。いま、それ、掲げて、茲に、いださん。

たもとの枝折

とをのとしといふに、母の身まかり給ひてよ

り、まゝしき母の手にかゝりまゐらせけるが、明くれ、水仕のわざさへ、いたく、つとめて、いとまある時は、もの縫ひ、てならひ、などきびしく、させたまへば、まりつき、はねつく事をさへえらで、ことし、ひとせの春を、いたづらに、こゝろならぬさとに送れり、そのころしも、俳諧てふことをすきて、ほくなんどいひまろぎ、母上に見せまゐらせけれど、あとかたもなきえせ事なりとて、見ては、すてたまひ、他の人のをぞ、見たまひては、ことに、ほめなどまたまひて、はうび、たまはりけるにぞ、わらはは、いとも、かなしくて、ままはゝならましかばと、心のうちには、ふかく、うらみまゐらせけるに、いまや、人まじはりまつゝ、ものかき、文などかきたまふ人人らの、すくなき中に、よからぬながらも、かく、手かき、ものぬふことの、人にも劣りはべらぬは、ひとへに、まゝはゝのなさけの、うすからざるより、かゝる身のうへとは、なりにきと、思ふに、いとも／＼ありがたく、かたじけなき事になん、とぞおもふ。

　　莖立やたゞ春の日の恵より

此文は、彼女が、自身、幼時の心懐を述べ、また、繼母の恩を謝したるものにて、頗、深情の文字なり。讀み去り、讀み來つて、彼の人となりの程も思はれて、幾多の感なき能はず。

時の古今、地の東西に論なく、いとも幽艶なる詩神を慕ひて、凡情、俗想の假界に、昔の名殘のみ

を止め、あるは、花に嘆じ、あるは、月に悲みける人等、少なからざれど、賤女界には、唯、一の歌川を見るのみ。歌川は、越前、三國の遊女なり。容貌、絶麗にして、資性、閑雅、俳句を詠み、歌を能くし、筆道に巧に、遊藝に達し、殊に、琴を彈ずるに妙を得たり。不幸にして、賤業界にありと雖、高僊なる詩情、禁ずるによしなく、主に請ふて、東國に行脚す。三國峠の烟霞を分け、墨田川の都鳥にこと問ひ、風雅の餘情、あふれて、一曲の琴聲となり、大に、江戸大都の俗物を驚かしめたり。歸るに及んで、餞別の品、五駄あり、然れども、悉く、分ちて他に與へ、其身、また、一物を止めず。のち、尼となりて、瀧谷といふ。此女の詠句には、

目覺しに琴しらべけり春の雨
爪紅のまづくに咲くや秋海棠
おく庭のまれぬ寒さや海の音

等、數多あり、みな、宗匠好絶、師すべし。

大橋は、實名りつと云ひ、文學に秀でたり。嶋原の遊女なり。身まゝになりてのち、尼にならんとせしも、老母を養はんために、栗原一素といふ人の妻となれり。家貧なりけれど、婢女をも使はず、みづから、總ての雜事を爲しゝが、常に、源氏物語を好みて、飯を炊きながらも、此書をはなさゞりしといふ。斯の如き女なりしを以て、廣く、文道に通じ、當時、和學者を以て稱せられし者も、大橋が名を聞き、歌文を見て、賞賛、措かざりしといふ。ある時、島原の邊りをすぎて、

餘所に見ておもふもつらし身の昔
うき川竹のさそのゆうべは
の歌あり、懐舊の情、さもこそと思はる。六橋、また、畫もかき、風流、類ひなし。自畫賛に、

わするなとちぎりし春は夢なれや
ねざめとひくる初雁のこゑ

最、餘韻に富めり、又、海邊の雪を詠みて、

わたの原波もひとつにとましろき
ゆきをのせたるあまの釣舟

實景、さながら、眼前に現はる、心地す、何等の妙巧ぞ。大橋、また、文も能くせり。彼の、遺文集覽中に載せたる、紀行文の如き、極めて、賞するにたえたり。

日月喩

大町桂月

天に日月あるは、人に男女あるが如し。日の光は明かにして強く、月の光は清くして麗しく、自から陰陽のけぢめあるは、男の徳の剛を尊び、女の徳の柔を尊ぶに譬ふべし。されバ、夏の日は畏るべく、冬の日は愛すべしと云ひけむ。げに、夏の日影はげしく照りては、目もくらみて仰ぎ見ること能はざれども、紅葉かつ散る小春の日和のうららかなるまゝに、南の軒の下に横はりて背をあぶらむは、如何に心ゆくことの限なるらむ。夏の日はやがて威なり。冬の日はやがて恩なり。寒暑并び行はれて天の時とゝのひ、恩威並び施して男子の徳全きを得べきなり。父よく〳〵といわけなきまな子に呼ばれつゝ、その紅葉の如き手に虎鬚をよ

まるれど、三軍を叱咤する鬼將軍の瘢痕ふかき頰は、にも覺えずゑくぼはあふれなむ。あくまでも強きは男子の常なれど、武士もさすがに、物の哀は知れり。男の德一に日に比すべきなり。

春の夜ふけて花の林の間におぼろげにさしたる月は、窓ふかくたれこめてよろづ嬌羞を帶びたるをとめ子にたとふべし。銀河一滴の水をこぼさず、桐の葉いまだ秋を告げざる三伏の夕、蚊遣火の烟にむせびながら軒の端ちかくさす月は、愛にやつれながら、さすがに堅く操をまもれる女に似たり。秋風になびく尾花の末にはのめきては親しむべけれど、川風さむく千鳥なく冬の空にさえては、凛としてまた仰るべからず。女の德一に月になぞらふべきなり。

雞の聲のこる茅店の月、離人の腸をたち、雁が音わたる關山の月、征夫の心を傷ましむる媒となりて、物のあはれを添ふるは、なべて女の性の感情ふかきにやたとへむ。立ちわぐ黑雲に日はかくれて、むら雨はげしく降りまさるとも、晝の光り猶は自から明かなるは、男の心のなべて智に富むにかたどるべし。月は自から光をはなつものにあらず。日の光をうけて始めて光あり。女は自から立つものにあらず。男に依りてはじめて立つ。すべて女は力よわきものなれど、あくまでもかなしみていたはるべきなり。

また日の晝にかゞやき、月の夜を照すは、男の外を司り、女の内を治むるに似たり。男には、男の分あり。女には、女の分あり。めゝしきは男の分

にあらず、をゝしきも女の分にあらぬなり。伊邪那岐命、伊邪那美命と天の御柱をめぐりてみあひませしときに、伊邪那美命まづ、あなにやし愛男をとのりたまひて、くみどに興してうみたまへる御子の、ふさはしからざりしも、たゞごとにはあらざりけり、呉牛月に喘ぐも日と同じき熱さあるにあらず。月はぬば玉の夜、清風そよぐ時にあらはれてこそ人のあはれみも深かるべきに、夕日沈まなくにまだき主じ顔にも出でたらむには、うせなんものは其光のみにはあらざらむ。女もまた、つゆさしいづることなく、よろづ夫に從ひてぞ、妻たるものゝ道はたつべかりける。彼の男女同權論、女子の選擧權など唱ふるものは、やがて、自から其德を損するものなり。神州女子の傚ふべき所にあらず。

左の一條は、事の確否はしらされども、今古殘葉といふ書にありしまゝをうつし取りて、貴社にまゐらす。餘白にかゝげられなば、幸甚し。

荒野文雄

文ひろげの女の記

作者しらず

天正の頃、都五條わたりに、文ひろげの女とて、年の頃、四十路に傾けるよはいにて、氣、いとゞ、そゞろがましく、一通のふみを、扇の箱に入れ、首にかけて、花の頃は、東山の木陰、月の夜は、五條の橋のうへなんどに、ついゐて、彼文を出しきて、たからによみ、また、しずみてよみなどし

て、聲をわけて、なき悲しみ、しば〳〵。獨ごといひて、又、彼ふみを、箱にをさめ、首にかけて、立ちさりぬ。かれは、信長公の愛妾小野お通につかへて、千代といへる女なり。いとけなきころより、お通の心にしたがひて、文の道、女の業など、あさ〳〵しからず侍りしが、或時、都の商人葛藤左衛門といふものに、しのびて逢初、心を通す事、三年をかり、思ひあまれる秋の夕暮に、

　　羨まし人目なき野のきり〴〵す
　　　鳴もこゝろのまゝならぬ身は

かくよみて、打ふしけるを、お通は、情ある人にて、いかに、かく、なげきがちに侍るぞ。わかき女の事なれば、われなき心のみだれも侍りぬべし。つゝまずかたれよ。わろからぬやうにはからふべしと、うらなく、いさめければ、ありしことゞも申出て、今は、いのち惜からねども、人にわかれまゐらせさぶらはんこともかなしくて、つらきながら、ながらへ侍ると、さめ〴〵と歎きければ、いと、ふびんにおもひ、ひそかに、葛藤左衛門をめして、千代を得させける。たがひに悦び、京へつれ返り、五條のほとりにて住ける。さて、いかがしたりけむ、世おとろへ、あり詫しまゝに、互の事ども、よからずなりて、千代も、つれそふかたく見えければ、岐阜へたよりのをりふし、あらましの事ども、かきて、お通の方へ申遣ける、そのふみのはしに、

　　たてはつるものとは見つゝ笹蟹の
　　　いともたのめしこゝろ細さに

といへる惟喬の御子のうたを、書そへてつかはしける、お通、いと、あはれにおぼへて、かの男ののかたへ、文して、いひ送りける、その文、

久しく、よすがなく、おとづれ、きかまほしきをりから、千代かたより、荒増の事ども、文して、聞えさふらふよ、さゝかにの、いとたえはつるものとは見つゝと、ふるごとなど、くれぐれ、なげきこし候まゝ、此かへりごとに、

とにかくに折節ことのたがひめを
うらむる中ぞちぎりなりける

と申遣はし候。さなきだに、女は、心あさく、何くれの事を、せきむねにたもち候へバ、男に、すゝめられがちにてさぶらはむずれども、もとの清水、わすれがたき御心を、われとしも、たのみ入候。所からの御住居、夕がほのかきねも、まむらに、人目も、つらく覺しさぶらはむ。東山ゆうかわん房へ、御使候はゞ、よろしく、はからひ申さるべく候。法師は、とりつき荒々しく候へ共、底意なくて、山の井を、むすび分ても、あしからず、はからひ給ひ候べし。それから、所々のさわがしさ、うへにも、御けしき、をだやかならず、つきぐの人も、心ならず候ゆゑ、うれしき便りまでに、あらまし、あどけなく候かしく。

此文に、男もなぐさみて、互にわかれず、五とせほどへけるが、彼男みまかり、そのゝち、岐阜も、ちりぐになりて、世のさまも、かはりければ、彼女、氣もそゞろになりて、むかしの事ども、わ

すれがたくや侍りけん、彼文を、身にそへて、よみては泣、なきてはよみ、ひとりごとして、こゝかしこ、まよひありきける。あはれなりし事ども也。

井蛙小錄　井上賴文

この處女の賦は、才學の聞え高かりし井上通女の作なるを、西京の儒、元寬はかせが、浪華の畫伯、池大雅の手して、優雅なる楷書にかゝしめ、そを、櫻木に摹刻して、世に匂はしゝものなり。元寬はかせは、漢まなびにすぐれたるのみにはあらで、我が古書の散佚せん事を憂ひ、大織冠公傳、關市令義解等を考訂して梓に雕れるなど、その功、いと多かり。西京に住みて、通稱を、佐野少進と呼べりしとか。

古云、才難、非徒辯佞之謂也、士而佞也、猶或免也、婦有長舌、維厲之階、漢班氏踵青史、述女誡、何其才之遠也、夙守節撫孤何其德之貞也、今特刊女誡、余竊有取焉爾、嘗讃岐有井上氏者、有才而貞、殆班氏之亞也、而作處女賦、足以自誡、辭有可觀、故附而傳之、

明和丁亥正月　阿波源元寬識

處女賦　讃岐　井上氏（名於通丸龜三田某妻）

遺嚴君之明訓　居茲閨閣之幽
師詩書學四德　經內則習和柔
牝雞晨於殷　喜關雎匹于周
遍看古昔之傳　心與列女同遊

温故寧不能及　希修身寡悔尤
書中不遠萬里　眼前忽到幾州
見彼敬姜于魯　謂此孟母於鄒
求女師其未少　古人德以迄今
履霜以思致氷　抱是寒木之心
服節儉不暇飾　何冶容而效淫
向窓下而紡績　燒膏油而執鍼
此小勤不足苦　耻惰身不如禽
只徒飽食温衣　無成而送光陰
括囊願緘口戒　畏鷄鑑女史箴
嗚呼余志之堅　不可以貧富侵
雨露濕制春服　西風來催秋砧
樂只有二親在　家致何爲不力
家翁之嚴且慈　母子之慈而則
惠予以義方愛　敎予以正法式
令余得窺古賢　使余無生姑息
知女子之多愼　識事之有纖織
安閨中志在內　不除而樂草色
身自不出戶庭　言則不出於閾
精神肅而以閑　四體靜而端直
恐日月之荏苒　無業之供子職
願守身無詒罹　永思而以抑抑

をんな仁義物語上(二)

著者未詳

又、さいそいふくにのけんちよは、そつそ、おもはずも、わしきやまひをうけたり、えんをむすびて、ほどもなきうちの事なれど、にようばうのお

や、たへかたくやおもひけん、又、よのかたへやらんといへど、女ばう申やう、そのもの、かやうのやまひをうくる事も、みな、わが身のさだまりたる事也、さら／＼、たのをつとに、かへんとおもふこゝろなし、もし、かへんとおもふとも、ふうふのみちをそむかむ人たるものゝ、よびむかへんや、しぜん、よぶ物あらば、みちをしらぬ人たるべし、其人のつまにならんよりは、そのまゝ、そひて、けんぢよの名をえたり、かやうの物がたりをきゝ給ひて、こうがくにし給へといふ、十七八の女ばう申けるは、さて／＼、こうしとやらんのつたへ、ふうふのみちをしらぬものは、こんじやう、ごしやうも、とりうしなはんといふは、いかにもとひけれど、としごろの女ばう、なか／＼の事、こうしのみちは、まづ、げんぜあんをんにをさむるぞ、もつぱらとし給へど、みちをそむくときは、その身に、あしき事きたる、又、しやか佛も、ふうふのみちたゞしきぞ、ざいけのぼさつととき給へど、みちをそむかば、らいせも、あびぢごくにおつべき也といふ、わかき女ばうの申けるは、こうしのみち、じんぎれいちしんの五常といふ事は、そんなも、そのみちをきゝて、よろしき御事にて候はゞ、とてもの事に、御物語候て、きかさせ給へと申ければ、としごろの女ばう申やう、じんぎれいちしんの五じやうは、人げんのさはふなれば、なにとて、そとて、をんなのへだてあるべく候や、じんぎのみちを、わらはでときのものゝ、物語すべきとは、事おかしき事にて候へ

ども、こゝかしこ、すこし、きゝはつりたるを、かたのごとく、申てきかすべし、まづ、しんのみちは、しひの心なり、人げんたるものゝ、しひの心なきは、ちくしやうにことならず、たとへば、しひをしらずして、人になさけなくあたるものは、たちまち、そのむくいきたるべし、かくはしりながら、あるひは、よくしんなどにひかされて、しひをわするゝもの也、うまれつきて、しひしんのなきものは、一人もなし、天のめぐみをうけて、うまるゝにんげんなれば、天にいつはりなきゆゑ、うまるゝとき、しひしんそなはりて、うまるゝ事也、其しようこあり、たとへば、二つ三つばかりの子が、井のもとへ、はひてゆき、すでにおちんとせば、たれも、やれ、かはゆきとおもはぬ人はあるまじ、人に、よくいはれむとて、その心いづるにてもなし、又、その子のおやと、ちいんにて出るにもあらず　はん心よりあらはるゝねんなり、其ほか、まひ、うたひなどの、あはれなるをきゝては、みな人、なみだをながして、かんずるなり、心にわたくしなきゆゑに、かくのごとし、されば、うまれつきたる所は、たれも、しひのこゝろはあれども、よくにひかされて、おやこ、きやうだいのなかも、たがひに、あだかたきとなる事也、さようなれば、天たうの御せつをうけ、さまぐのあくじいできたる物也、又、ほとけのをしへに、せつしやうかいと申は、ものゝいのちを、ころさぬ事也、これ、しひ也、しかれば、こんしやう、でしやうもおなじ事也、これ、人の第一なれば、仁

のみちとて、五常のはじめにおきたまへり、ぎといふは、ぎりの事也、ぎりをしらぬは、人にあらず、ちくしやうにおなじ、此ぎりも、人の心にそなはりてあるもの也、其しようこは、たゞいま、かつゑしなんとするに、人きたりて、しよくもつをあたふるに、あしく、きたなく、ざふごんしてあたふるならで、いかにかつゑしぬるとも、たれかくふべきや、これ、ぎりの、人の心にそなはりたるゆゑ也、かやうに、すこしの心にて、いのちをすつれども、よくしんになりては、ぎりをわすれ、大きに、ものをうくる、あるひは、人をたゞかりて、ものをとり、よこしまなるみちにて、人のものをうくる事、たちまちに、そのむくいきて、やがて、我身のあだとなる也、ぶつはふには、こ

れを、ちうたうかいとて、いましめ也、人は、たゞ、すぐなるみちにて、物をうけ、又は、人にもほどこしたらんは、天たうのめぐみにかなひ、其いへ、しそんまでも、はんじやうする也、又、れいとは、いしやう、よろづ、ときどきのはふにたがはぬを、身にき、われより上れる人をあがめ、したゝめなる人をあなどらず、をごる心あるべからず、かやうに、すぐなる時は、天のめぐみ有て、あくじきたらず、しかるに、れいのみちをしらずして、ぜんじ、わがぶんざいにすぎ、をごるによつて、人の物をかりては、かへす事もせず、人のねたみをうくる事、わがぶんざいにすぎたるをごりゆゑ也、かやうのおこなひにては、天のめぐみにかなふべきや、ぶつはふには、じやいんかい、れいのみち

とおなじかるべしと也、しやいんは、をでる心也、又、わがぶんざいより、うちはにする事も、れいのみちにあらず、これ、よくしんよりおこる、ちくしやうにちかし、上なる人をあがめず、ぶれいをするときは、たちまち、ろのあだをうくる、又、しためなるをあなどれど、ねたむ心、つひに、わが身にきたるべし、どのよふもおはき事なり、又、ちは、ぜんじのぜひ（是非）をわきまへ、よこしまをさり、しんぎれいのみちを、よくしる事を、ちとはいふなり、さて、信は、すこしも、いつはりなきをいへり、何事につれても、うのけのさきほども、いつはりなきやうに、心をもつ事也、これ、ぶつはふには、まうご（妄語）、きご（綺語）、わり（此所二字蝕食）りやうぜつとおなじ事也、されど、五常と、ぶつはふのみち、か

たはしをとりあつめて、かたのごとく、申きかせ候、こうしのつたへは、もんじにかきて、其しなしな、ふかき事のみにて、其ぎりを、ことごとく、しることは、なりがたきと申せば、まして、わらは、をんなの身として、もんじもしらず、ちゑもなけれど、そのさうおう（相應）に、あるちしや（智者）の、五しやうのかたちを申きかされ候、かへすがへすも、五しやうのみちを、わらはのやうなる、もんじもしらぬものゝ、かりそめにも、ふたすることにあらず候へ共、みなみなのしよまう（所望）のうへは、れうけん（了見）もなし、そのうへ、物がたりをきゝ給ひて、一つも、身のとくにもなり候はんかと、おもひ参らせてこそ、かたり申候へ、かまへてかまへて、人に、うはさあるまじく候、人きゝ候はゝ、かたはらかゝ

へて、わらはれん事見るやうに候と申けれど、二人の女ばう申やう、さて〳〵、よきがくもんいたし候、もんじにかき申とも、つまる所は、此ぎりに、きはまり候べし、まづ、此物がたりをきゝ候て、我々の身のとくになり候、中にも、あさゆふ、心に申すねん佛のたよりにて候、よのなかのらうせうふぢやうを見参らせて、此よは、ゆめまばしのごとくなれど、のちのよを、たすからんとのみ、心にねがひ、ねんぶつまうし候が、五しやうをしらで、いかほど、ねん佛ばかりを申候とも、ほとけにはなるまじきと思はれ候へば、今よりは、其心をかりなりとも、五常をまもるべきとおもふ心のいでき候事、これもつて、有がたくぞんじ候と申候へど、としごろの女ばう、これをきゝ、さて〳〵、みな〳〵は、よき心えにて候、五しやうをだに、まもり給はゞ、ねんぶつを申さず、だいもくをとなへ給はずとも、佛の御心にかなふべし、又、いかほど、寺まゐりして、百まんべんのねんぶつ、だいもくをとなへ申とも、心のよこしまならば、などか、ほとけのうけたまふべき、されど、その心を、神の御たくせんに、しやうぢきは、一たんのえこにあらずといへども、つひには、日月のあはれみをかうぶる、又、天ぢんの御歌に、

こゝろだに誠のみちにかなひなば
いのらずとても神やまもらん

との御ちかひなり、かみと、ほとけは、すゐはのへだてときく時は、みなかみは、おなじ一たい也、かやうのしんたくも、みな、五しやうおなじなり

とかたり申所に、としごろ八十ばかりのおほぢ、此ものがたりを、ものかげよりきゝけるが、こらへかね、そのざへ出て申けるは、さて〳〵、さきほどよりの御もの語、はじめをはりを、物かげにて、くはしく、うけ給はり、かんじ入申候、われら、此としまで、せけんの人の身のおこなひを、よく〳〵見おきて候が、御物がたりに、すこしもたがはねば、一しほ、五しやうのおきてを、しゆしようにおぼえ候、さりながら、一つ、ふしぎなる事の候、われら、ぐちの心に、がつてん參らず候、たゞいま、じひの御物がたりに、おもひあはせし也、われら、わかきときの事なりしに、うとくなる人の候ひしが、せけんのくちにかゝるほどの、じひなる人にて有けれど、あくにんども、さま〳〵、あらぬ事を申かけ、きんぎんべいせんをこふに、うとく人申されけるは、此あくにん共をいましめて、しゆご人へめしつれて、くびをきらむはやすけれども、人のいのちをたつ事、もつたいなしとて、それ〳〵に、ものをとらせらるゝ、これをきゝて、あくにん、あるひは、ぬす人ら、りんごく、たこくよりきたりて、物をこひうくるもの、其かずをしらず、かの長じや申さるゝは、わがざいはうを、みなく〳〵とらせ、そののちは、我かつゑじにするとも、おほくの人をたすけ、われ一人しする事は、これ、大きなるじひなりとおもひて、きたるほどのものに、とらせざるはなかりけり、あるとき、みめよき女ばう、わか子をいだきつれて、かの長じやのもとにきたりて申やう、これこそ、長じやどのゝ

子にて候へ、また、わらはも、かつゑにおよび候に、何とて、御はごくみなきぞと申ければ、長者やおどろき、さら〳〵、おぼえなき事なれば、これは、よのことにかはり、物をとらせたらば、つまの女ばうが、此事、まこと〻思ふべし、さあらば、あしからんとおもひ、ものをとらせず、さんざんにいかり、ひつたて〻からんをと、いへおひ出す、其時、女ばうおもふやう、何事を申ても、ものをくる〻とき〻つるに、これは、ことさら、によりたることを、たくみすましてきたりしに、ものをくれぬ事のはらたちやと、かのあか子を、もんのうちに、すて〻ぞかへりける、長者や、これを見ていよ〳〵、にくきしよぞんかな、さりながら、此あか子がしる事にあらざれば、わが子をてろす事、ふびんなりとて、やしなひおやをき〻たて〻、ものをとらせて、やしなはせけり、長者やのつまの女ばう、これをき〻、さては、うたがひもなき、わがをつとの子也、ありしをんなは、しのびづまにてありけるとおもひ、はらたて〻、その〻ち、ふうふのなかあしくなりて、程もなく、りべつして、ざいはうも、大かた、女ばうかたへ、とりたれば、かの長者や、のちには、こつじきとなりにけり、せけんの人々、これをみて申けるは、此長者は、りんこく、たこくに、かくれなき、しひする人にて有しに、此身のはてのあさましさ、天たうといふこともなき事かと、みな人申あへり、此おはちも、いまにおいて、ふしんはれがたし、これは、いかなるだうりにて行つるぞ、御物がたり

候て、此おはぢに、ふしんをはらさせたべと申けり、としごろのにようぼう、これをきゝ、それは、ふしんまでも候はず、その長しや、まことのしひしんにあらず、なせるしひ、ぐちにかへつて、あくとなりしゆゑに、ほろびしなり、そのゆゑをかたりてきかせん、あくにん、みちならぬむじつを申きたる時、其あくにんを、つみにおとし候へば、おほくのあくにん、ぬす人ら、げにはおそれて、あくをとまる物也、一人をころして、おほくのあくにんをたすくるこそ、まことのしひなれ、つみにしづむあくにんは、われと、わが身をほろぼすなり、されば、こうしも、しよをよませ、みちををしへ給ふに、みちをおこなはず、あくしんあるものをば、ちうばつせられしと也、これ、みな、小をすて、大をたすくるしひなり、又、わか子をつれてきたりしとき、ろのをんなに物をとらせぬはだうり、これ、五しやうにろむかねど、天ばつ、いかでうくべき、ない〳〵のしひ、かへつて、あだとなるゆゑに、てんだうにみはなたれ、ふうふのみちさけて、ほろびたる也とかたり給へば、おはぢ、かんじて、いまこそ、ふしんをはらして候へ、たゞいまの御ものがたりども、あまりにみじかく候ひて、きゝたらず候、とてもの御事に、いますこし、かたりてきかさせたまへ、われらは、めいどのみやげにつかまつり候はん、又、このざのわかきにようぼうたちは、いまだ、つぼめるはなに候へど、よく〳〵、にんげんのみちを御ものがたり候ひて、きかさせたまへと申けり、

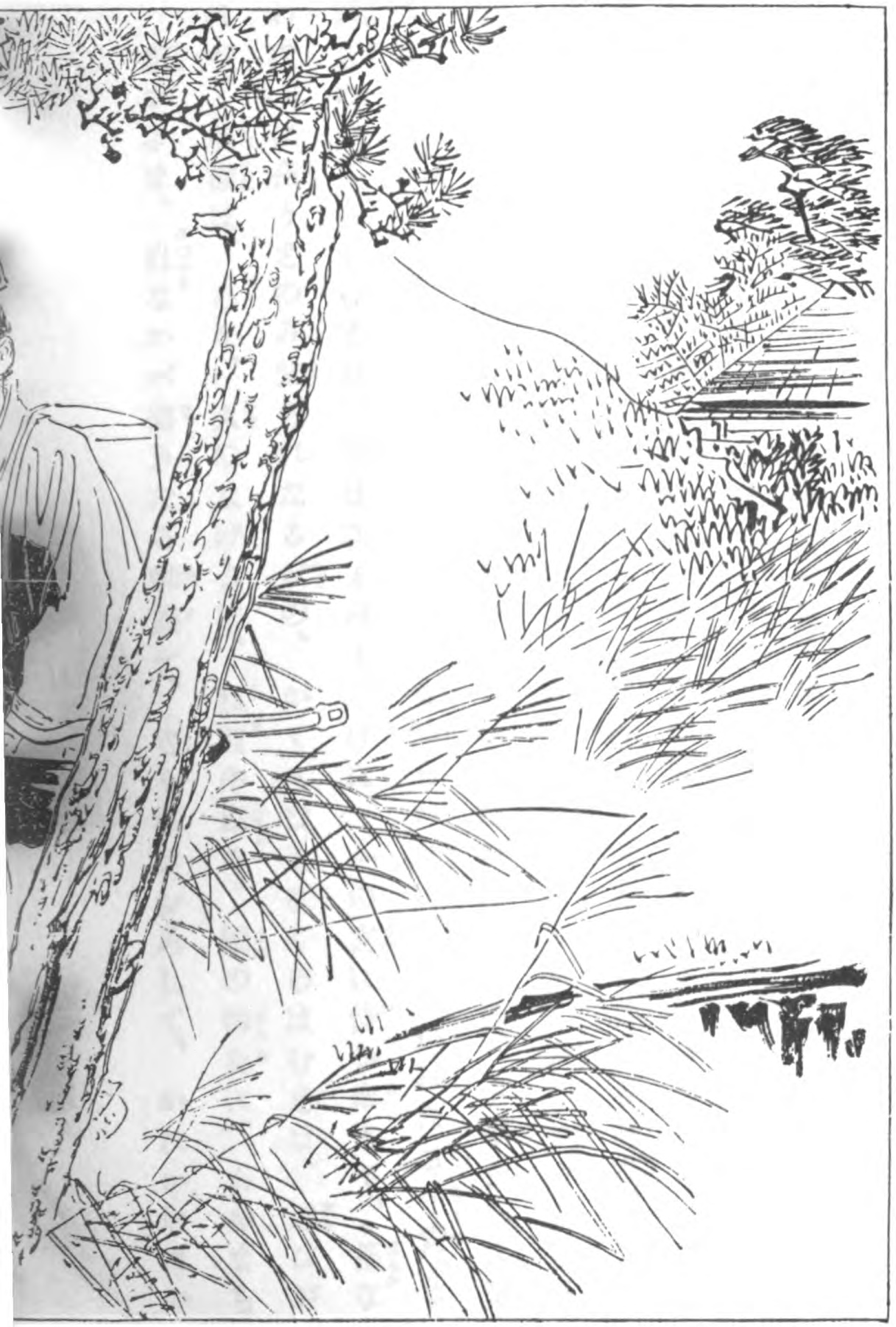
（をんな仁義物語上終）

花ふゞき

塩井雨江

その三

秋ふかき深草の宿、尾花の袖に通ふ風の響は、間なく垣にきこえ、萩の袂に宿る露の色は、隙なく軒端に見ゆるとすれど、人のたよりは、山路にも舟手にも、絶えはてゝ、そよとばかりもきこえず。門のしのぶ、思ひ亂るれど、世にはあはれと、問ひ慰むる人もあらねど、ものさびしさは、げに、わが身ひとつの秋なる櫻姫、賤機。うつりゆく世のはかなさを、思ひつゞくれど、月のまどかなるも、天のさやかなるも、唯心細さのみ、身にしみまさりて、人の上、かなたのわたりの、いやましに懐しく、はてなき大空を、うちながめて、ゆくへも知らぬ思に、あこがれたる今宵、さはとて、武文のかく在らむとは、思はざりけり。げに、一の宮に侍き奉りて、遙なる土佐のわたりに在りとのみ知られたる父の、かくもはしなくあはむとは、思ひがけざりければ、賤機は、あな、人のなげきに、狐狸や戯る。姫の御身に、あやまちあらせど、思ひざま、自なかば捲きたる御簾を、とくひきおろして、かれいかにか





すらむ、近よりなばゆるさじと思ふけしき、さゝやかなる双手をしかとうちかため
て、きつと彼方をまもりたるけぶりにも、主を思ふ頼母しき心の見えて、やさしや。
武文は、竹椽にとりすがりて、かしこまりたるまゝ、とみには、ものもいはず。何
の聲なるらむ、はら〱と、竹椽にふりかゝる音のみ、高くきこえたるが、やゝあ
りて、わづかに面をあげ、賤機にうちむかひ、土佐より、武文がまゐりつる、上の
恙なきみけしきを、うち仰ぎ奉りて、武文なほ世に在る心地も仕るになむと啓せと
いふ。其の聲音、其容貌、きくに見るに、まさしき父の外ならねば、賤機も、さて
は父上にてましますかといひさま、立たむとすれば、御息所も、御簾を、手づから
かきあげ給ひて、あはれまさしき武文にておりけるが、思ひがけなきと仰せたまふ
言の葉も、末は曇りて、いつしか、おんぞにかゝる時雨。
櫻姫、常は、たよりなきに、思ひわびさせたまひつゝも、よも事あらで、人傳にも
きこえぬ事のあらざらむとおぼせば、たよりなき年月も、又なか〱に、頼みおぼし
たるを、誰ならぬ武文が、唯一人、はる〱ときつる旅衣、思へで、思ひたちたる
ゆゑの、心元なく、きづかはしく、うら歎きの、とゞめもあへられず。武文よ、汝

一人參りたる、必ぞ、仔細あるらむ。土佐にや變る事のありたる、宮に恙のましましてか。疾くもつげね。きかまほし。武文は、よく笑ふやといはれたるものが、われ見てより泣てのみ。心細くもなりにけるかな。かばかりに、もの思はせける、いとはしやとのたまへど、武文はいたくつゝしみて、あなかしこき仰せな給はれそ。ながながに、武文が身を置く方もおぼえ候はず候。上の恙まさぬみかげを仰ぎ奉り、嬉しと思ひ候へど、何となう、涙の湧きかへり候て、とゞむべき方を知らず、よしなき御衣を濡らし奉りたる罪、われながらうら恥かしく候。武文が心ならぬ不忠、ゆるさせ給へど、幾度か竹椽に、頭をうちつけぬばかりに、かしこみて、土佐には浦なみも騷がず、宮は玉體やすらかに、風雨のおん障も候はず。今宵、武文が、ともの見參あながちに、悲歎きたまはむ事のみにも候はず。秘にきこえ奉りて、とにもかくにも、み心のおぼし定められむまに〳〵、仕へまつらむ事の候て、夜を日に急ぎ、斯くは、まゐりのぼりて候なりと啓すれど、櫻姫は、やうやくに、御心落ち着き給ふらむ、頼母しげに、武文の方を見られしが、俄に心づき給ひけむ、あなおぞや、武文のさこそ疲れつらむ、露にもぬれつらむを、賤機はとく父の蓑を勞りてま

ゐれ、親は母屋にて待たんと仰せて、引き入らせ給ふ。

賤機は、御息所を、奥の御座まで、見送り奉りて、もとの竹椽に立ちかへりしが、常は君を思ふ矢竹心、唯一筋にのみ、引きはりたれど、父とも、戀ひしとも、さる方を思ひやる心の暇なければ、もと、撫子の露にはもろき少女なり。下には、老はる時なきを得ず。ましてや、久しき父に、まのあたりあひ見ては、何にかね怺へむ。父上なつかしう侍りきと、取りすがりて、よゝと泣き沈みたる袖を、武文は、情なげに、うちはらひて、われは一の宮の武士秦武文、ひかし御息所のみ蔭に、添へ奉りたる女はあれど、父よなつかしやと取りすがられむ女といふ者もたし。武士と生れて、君に仕ふる者、君を思ふの外に、心やもつべき。親をまたひ子をかへり見る遑あらむ、必や、君に盡くし奉る心に、隙あらむ。雉子は燒野に子をえ捨てず、猿も幽谷に親を呼ぶといふ世、親は海山も唯ならず、子は玉寶も數ならぬとは、人と生れつるからには、尋の常の情ぞ、唯、武士の立ち勝りたるは、義を知れるが故のみぞ、忠義にきたへたる一鐵心、下には、さすがに思ひあまるらむ、大空を見上げたる兩の眼、月のにほひか、露のいろか、はらはらと、散る雫すゞし。

御息所は、武文を、御簾近う召させられ、玉顔いとうるはしく、さるまても武文、忘れては、げに夢かとおぼゆる汝が音づれ、深草の奥家に月を見つゝ、汝にあはむとは、思はざりける世の中やと仰せ給へバ、武文はかしこまりて、都に着き候ひしは、きのふの黄昏バかり、堀河の御座所へ參り候へバ、築地の松、つねならぬ音の力なく、み門の傍の柳は、よる方なげにうちしほれ、いとも心細げなる御館のありさま、人やをはすとおとなへバ、月しづかに、水かすかに、答ふるものは、唯、木ずゑの嵐、草葉の虫のみ。こや如何にか成り給ひきと思へど、心も氣も亂れ候ひて、松の根もとに立ちより、一度は、腰の太刀に、手を懸けて候ひけるが、さては、わが心を盡したりとはいふべからずと、おもひなほし候ひて、此方彼方、ちかきわたりに、尋ね候へど、あるは北山といひ、あるは嵯峨野といひ、定かに御行方知り奉りたる者もあらねど、兎にも角にも、猶此の世に在すとあるを力草、露の命のあらむほどは、野をつくし、山をかぎりても、おん行方を尋ね奉らむものぞ、足の歩むにまかせ、よべ一夜、けふ一日、其處ともなく、此處ともなく、迷ひ／＼て、あこがれ參り候ひし、此處の野末。をりしも、月の桂の散り來る音かとおぼえて、遥に響くものゝ音

は、まがふかたなき。玉琴のおんねなり。嬉しや、武文なほ武運に離れずと、よろこびにものも覺えず、そらになり候ひて、柴垣を越え、御庭を荒し、御坐を騒がせ奉りて、思はざる不禮の罪。何によりてか忠臣となるを得む。あさましく候と、賤機をして申し上げ奉る。

武文は、なほひきさがりてかしこまり、今度とみにまゐりつるは、宮、土佐に移りおはしてより、おんもの思ひ、尋常ならず。もと、おん情深うまし〱給へど、人の悲歎きわびんを、いとはせ給ひて、そよとばかりも、おん愛は、おん言の葉に、出させ給はねど、露のおん窶は、御氣色に見え奉れば、預り奉る有井の三郎左衛門、所にありといふ琴の音、笛のふし、舞の袖を、かれはいかに、これは如何と、數をあまさず、ものを盡くし、心をこめて、慰めまゐらすれど、なか〱に、おん思を添へさせらるゝたよりと成るのみなるがいとほしさ。せめて、姫にてもましまさずと、思ひ奉れば、有井は情ある武士に候まゝ、秘に姫上の事を語り候所、何の苦しき事の候はむ、とく〱迎へさせ給へ、さすれば三郎も安堵仕ると申し候へば、しかしか宮にもきこえ奉り候へど、宮は兎もかくもあれとの仰せ。さて、御文賜はりて、

かくは馳せのぼりて候事に候と、懐より宮の御文とりて、賤機にうちわたせば、賤機はうや〳〵しく、おん文を戴きて、姫の御座に捧けぬ。

姫は、ひらきて見給ふに、その後のおんとぶらひ、情細に詞優に、かきつけられたる奥に、鹽籠の煙軒に近くて、遥ならぬ世もからく、浦なみの音、枕に高くて、舟人ならぬ袖も乾かず、山によりたれば、嵐はまなくきこえ、海にむかひてあれば、鹽はときなく見えぬなど、土佐の御住居のさま、あはれにかゝせ給ひて、末に

鹽舟のならびてあらむあらなみの浦のとまりもうれしかるらむ

舟人にてあらましものをと、かゝせ給へり。

姫は、御文をかき抱きて、泣き沈み給ひて、武文よ、とく今よりゆかむ。深草の野末に、獨浮雲の世をわびんより、諸共ま土佐の浦わに、うたかたの命つなぎてあらむ方や勝りてむ。賤機も來よ、諸共に玉藻とやらいふ草からひ、鹽といふ水汲まむと仰せて、おんぞをえばり給へむ、賤機も涙ながらに、御前にひれふして、姫浦に出で給はゝ、海松の衣おどろの袖、願ふ所に侍ると、申しあぐれは、姫は賤機の手を取られ、わが爲に都を捨て、深草にわび、今又浦風に身をやつさむといふいとは

しさ。如何なれバ、幸なき親を、さまで切にまつはりきこゆるらむ。汝も宿世はかなき身のふびんさよと仰せて、えむしは御言葉もなかりける。遂に、元弘の二年秋のくれ、深草の露ふみわけて、南をさして出で給ふ。越し方も行へも、霧のたちへだて、おぼつかなきは旅寢なり。

花菖蒲

千稲子

其の十三

巴猿寒月に聲さびて満山の梢に冬は來りぬ。さらぬだに露けき袖を、降りみ降らずみ掻きくらす此頃の空、木枯の風は長嶺を落ちて傾きたる軒端を拂ふ時雨を送り、婆娑としてちる落葉は人の訪はぬ門の戸を心細げに叩き、一筋の細き生命の筧の水も氷に絶えて音も聞えず。

山野悽愴の哀を集めて。空眺め勝に日を送る此家の主人は誰ぞ。僅に方丈の庵に雨の膝を容れて、憂世の夏蠅き塵を避けたるにやあらんか、されど、いと怪しむべきは、

はら〳〵と落つる木葉を掠めて讀經の聲の聞ゆるにもあらず、又、時雨の露に濡りて鐘の音の漏るゝにもあらず、折々絶えなんとする蓮の糸の、細く將た悲しく、堪へ難き涙を飲みて忍泣きする聲ぞ聞ゆる。

實にや、此狹き小さき庵の中は哀れさと痛しさの淵にぞある。身は平家の名冑なる新中納言知盛卿の御臺所にして、かゝる寂しき山里の、然かもいぶせき小屋の内に忍び給ふとは。つら〳〵古の有樣を思ひ廻らし給はゞ、如何に諸行は無常なりと覺さん、流離轉變の世とも覺さん、悲しさに口惜しさに胸いたくや覺すらん。況して夫と云ひ子と云ひ戎衣を帶びて遠く長汀白砂の間を迷ひ給ひ、旅雁歸る時も其音信を齎らし來らず、燕子春の霞の中に飛び返る時も其音信を知り給ふ事あらず、只西とのみ聞て夕日の影有明の月に、露けき袂を絞り給ふも哀れなり。

馴れぬ道柴を別けて裳裾は露にそほち給ひ、見もしらぬ山を攀ぢ聞きも覺えぬ巖を踏みさくみ、足も虛氣に迷ひ出給ひしは去年の八月、庭の芭蕉葉に秋風立ちそむる時にてありき。始は附隨ひて手を引き腰を押しまつりし御達女房も、悩み給ふを見捨てゝ一人去り二人行き、殘る者も今は賴みとすべくも思はれず、如何にせんかと

直泣きに泣き給ひて、死てんと覺す事も度々なりき。若し菖蒲の尋ねまつりて逢ひ來まつらざりしならで、御臺所は早く草葉の蔭に消え給ひしならん。漸く身を容れ給ふ所のみはありしとは云へ、昨日迄錦綾のもとに住みたまひしを、今は此さゝやかなる小屋の外、雲のおり伏す限り忍び隱れ給ふ所なし。アハレ秋の千草冬の枯野、それは大和言の葉の上にてのみ哀れの物と聞き給ひしを、落葉鳴らす時雨の音の寂しさ、松の梢に吹きすさぶ木枯の聲のすさまじさ、奧ふかき帷の内に女房の話草にのみ聞き給ひしを、今は我身の悲哀の涙を促す種とならんとは覺しもかけざりしならん、晝は空のみ打仰がれて御袂も露に朽ちなんとし、夜は衾漏る風に御夢を驚かされて枕邊は涙に所狹きまで濡れまさりぬ。

菖蒲は此有樣を見まつりて理なりと思へど、若し御身に病氣など引き起し給はゞゆゆしからんと、御側を離れずつとめて慰めまつれど、我さへ同じ胸の思にくれて、云ふべき言葉も震へ勝に、果は諸共によゝと泣き崩れ、全く淵瀬の波に漂ふも哀の至りなりけり。

かゝる内にも月日は過ぎ行きて、寒さはいや募りに募り來り、曇り勝なる空暮れて

明日の朝げ、遠近の山の頬に雪白う置きて、枯れたる梢に白金の花はかゝりぬ。菖蒲は寒さをも厭はで降り積る雪を拂ひて、朝夕の營みの料を求めん爲めにいそ〳〵と出て行けた、御臺所は其跡を見送り給ひて思はず數點の涙を膝の上に落し、忝なしと宣ひしまゝ聲を飲みて暫く泣き伏し給ふ。

漸く涙を拂ひおとして端近ういざり出で給ひ、碧瓦金彩に積みたる雪よりも一入哀れ深しと、珍らしげに眺めおはする時に、いつになう忙しく歸り來りたる菖蒲は、御側近く進みより、目の端に莞爾なる微笑を湛へて、喜ばせ給はれと云ひつゝ顏を仰げた、御臺所は怪しげに顧み給ひて、いつになう早かりしことよ、さぞや寒うありけんに、いざ火びつに暫し暖たまり給へや。喃菖蒲、かゝる寒き日の下に迷ふ身には喜と聞くだに何となう嬉しき心地するに、如何なる事の侍りしか、早う話してたもれやと、仝じく愁顏に微笑を浮べて尋ねたまへた、菖蒲は何も膝を進み寄せ、『聞し召せ、今朝漸くに殿方の音信を知り侍りし』、『なに、御便りとや、今は何處の邊りにましますらん、それ聞き給ひてか』、膝を向け直して慌しく宣ふに、菖蒲は實に爾の御事よと思はず涙を浮べ、里に出でゝ人の話し合ふを聞き侍りしに、平家の方

方には、月の入る西の海邊の果にさまよひ給ひしを、九州の豪族武士どもの附き從ふ者も多く、また御傍に仕うまつらずとも心を寄せまつる者も澤にあれむ、やがて其等の從を驅り集めて、朝日に紅の旗幟を飜へし、眞帆に風を孕みて恙なく此方の海路に上り給ひ、生田の森の蔭繁き木立をひらき、一ノ谷の底つ岩根の搖ぎなく、御城を築き構へ、嚴こゞしき鵯越を背に負ひて前には八百重の潮卷き寄する荒海を控へ、その内には、死を惜まぬ武士共が、平家の御爲に敵の奴一人も寄せじと備をさをさ怠らず侍るよし。されば此度は如何に驕りたる源氏の武士もおぼつかあからんと噂どり／＼に候へば、一度は思はぬ北山嵐に散にし都の花も、春に逢ふべき時も近きに侍らん、春日野の春の霞の棚引く折々、袂をかざして若菜を摘む時も近きに侍らんかし、御心安らかに思し給ひて、いぶせき庵なりとも今暫しの程忍びたまはれ、如何で天津御影の平家の方々を見棄てたまはんと、慰めまつりつゝ云ふに、御臺所は世にも嬉しき面地にて、實にさあらむ都の地を踏むも近き内に侍らん、喃嶌浦、朝夕に神佛に祈りまつりし甲斐ありて、夫に逢ひまつり子に逢ふ時も程はあらじかし。思へど世はさま／＼の物に侍る事故とのたまひつゝ、喜びの涙を浮べて思

はず西の方を拜みたまふいたはしさ、菖蒲は見るからに胸も張裂くが如き心地して、密に瞼を押し拭ふ袖も、秋の草葉の露繁かり。

文林

山皆紅葉　近衛忠煕

むら時雨めぐり〳〵てそめつらん
見わたす山はもみぢなりけり

寒夜衾　毛利元德

いかにしてうまいはせまし厚衾
かさねてゝ猶さゆるえも夜を

東久世通禧

すきまもる風いや寒しふゆの夜の
閨のふすまはうちかさねても

鍋島直大

まろねする人いかならんあつ衾
きてすら寒きふゆの夜すがら

前田利嗣

風さえてみさへこほれる冬の夜も
まらぬふすまぞ嬉しかりける

長岡護美

深きよの閨のわれまのかせさむみ
ひとりふすまを誰とかさねん

あつぶすまかさねてもなほ埋火(うづみび)の
　はしきむかりにさゆるよは哉(かな)
前田　利鬯

あつふすま打(うち)かつぎても思(おも)ふかな
　水(みづ)にわれたるさとの夜(よ)ぶすま
高崎　正風

あつぶすま重(かさ)ねても猶(なほ)さむけきは
　積(つも)れるとしのまるしなるらん
津輕　承昭

笹(さゝ)の葉(は)にあられの音(おと)のさゆる夜(よ)は
　厚(あつ)きふすまもさむけかりけり
竹屋　光昭

堪(たへ)がたくさむき霜夜(しもよ)もやすらけく
　ねぶる恩(めぐみ)はふすまなりけり
本多　忠貫

閨(ねや)の戸(と)のすきもる風(かぜ)にゆめさめて
　あつきふすまも寒(さむ)けかりけり
池田　政禮

厚(あつ)ぶすま重(かさ)ねし夜(よ)はもさむけきは
　老(おい)にちかづくまるしなるらん
水野　忠政

さゆる夜(よ)もかつけむ夢(ゆめ)の結(むす)むれて
　冬(ふゆ)をへだつるあつぶすまかな
前田　利昭

あつ衾(ぶすま)かさねてぬればさゝの葉(は)の
　さやく霜(しも)よもふしよかりけり
石山　基正

長谷　信成

呉竹のよさむのかぜもそよさらに
かさねてしらぬ閨の小ぶすま

前田　利聲

手枕のすきまをさむみいまひとへ
重ねまほしきふすまなりけり

諏訪　忠元

野秋風

萩の花まださきのこるみやぎのに
いたくなふきそ秋のゆふかせ

黒川　眞頼

寒夜衾

重ねても寒きしも夜のあつぶすま
あつきものともおぼえざりけり

宮地　巖夫

あつ衾きてもさむきはかしらにも
霜のおきそふるしなるらん

北郷　久政

あつ衾かさねてもなほさむきかな
さまの板やよしもさゆる夜は

小出　粲

みしろげはうごく衾のあひだにも
寒き夜かぜのふくこゝちして

坂　正臣

大路ゆく人おとすなりあつぶすま
かさね着てだにさむき霜夜を

風早　[illegible]

鐘の音もさえて聞ゆるしも夜には
薄きふすまぞわびしかりける

植松　有經

厚ぶすまひきかへきても寒き夜は

おきわかすより外なかりけり
谷　勤

あつ衾ひきかつぎてもかつぎても
さゆる夜床においをえるかな
大口　鯛二

明方のふすまのえりのつめたきは
おのかねいきや霜とむすべる
松本　高明

あつ衾かさねきてだにおひが身の
ふしわびにけるよはの寒けさ
千葉　胤明

老人のふすまいかにとおもふかな
寒さみにえむふゆの夜わけに
岩崎　勝從

今宵こそ雪にはならめあつぶすま
かさねても酒さえとはりつゝ

落葉　西川須賀雄

朝鳥のねぐらをいづる羽かせにも
散りて亂るゝ木々のもみぢ葉

冬山居　糸山　貞幹

紅葉ちり菊はみだれてたづねくる
人さへかるゝふゆのやまざと

月前鴈　石丸　忠胤

かりがねの聞ゆる空を出てみれバ
夜やふけぬらし月かたぶきは

野外暮秋　林　甕臣

さを鹿もよりて重なりふせるなり
霜まよふ秋と野はなりにけり

嶺猿吟　柴田　顯光

大江山あらしさびしくふきたちて
みねにましらの聲なびくなり

松風　大町　芳衛

みちのくの松がうらしま風ふけば
八百しまかけて琴の音ぞする

妾の三年祭に　草野　隆道

わかれしは昨日とばかり思ひつゝ
またふほどにや三年經ぬらん

名所浦　篠原　政禎

松風をおひ手にうけてゆくふねの
帆かげかずそふすみよしの浦

寒夜衾　鍋島　榮子

身うごきもならぬ計にかさねたる
ふすまのうちも寒きよはかな　蜂須賀隨子

霜こほるよはの寒さをゆめにだに
しらでふすまのあたゝかき哉　前田　朗子

あつ衾かさぬるよはも身にしみて
吹おとさむし木がらしのかせ　柳原　愛子

重ねてもあらしの音の身にしみて
ふすまかろくも思ふ夜半かな　松平　隨子

あつ衾かさねてもなほさむけきは
閨のうちにもしもやまくらん　保科　節子

年と共にかつくふすまを重ねつゝ
老ぞおぼゆるふゆの夜半かな
小池　道子

あつ衾うちかつぎてもさゆるかな
池のこほりもいまむすぶらん
北島以登子

あつ衾かさねてもなほさむきよを
まづしき人はあかしわぶらん
鳥尾　廣子

重ねきしふすまの内もふくかせの
もる心ちする夜はにもある哉
三島　竹子

よもすからゆきぞふるらしあつ衾
ひき重ねてもなほひえにけり

おく霜に鐘のとさえてかさねたる
ふすまの内もさむきよはかな
小笠原艶子

夜を寒みかつく衾にいとあつき
親のめぐみをまづおもふかな
保科　寧子

いねかてにねつやわぶらんあつ衾
重ねてもなほさむきこの夜を
高崎　竹子

あたらしきことしのわたのあつ衾
うち重ねてもさむしこの夜は
鶴　久子

さゆる夜もねらぬ衾にねられけり
中島　歌子

つくしのわたのあつき恵は

星河欲曙　諏訪　晴子

あまの川はしもうするゝ秋の夜の
空もしらみてあけんとすらん

折にふれてよめる　阿部　匽子

ますら夫の身よはあらねど大御代を
おもふこゝろは立もおくれじ

海邊月　安東　菊子

もしほやく小島のあまも秋のよの
月のあはれはくみてしるらん

時雨のふりける日思ふ事ありて　尾崎すう子

音のしてふるは軒ばよわがそでの
ぬるゝや何のしぐれなるらん

鹽竈煙　師岡須賀子

立のぼるけふりの末ものどけくて
からき世しらぬ賤がまのうら

桔梗原　河野　文子

矢さけびのなごりも今はたえはてゝ
秋かぜそよくききちかうがはら

月前雁　海上　壽子

月夜よし夜よしといひて　菅の根の長き夜すらを
小金門の金門もさゝず　敷妙のまくらもまかず
はし居して月見る時に　なきかわす聲も冴かに
かりわたる見ゆ

あはれ其幼子　横井知萬多

紅葉の如き諸手をわざとげにならべて、兄上歸り

給ひしかど、おとなしやかにいふに、母は傍より、こは兄上にあらず、をぢ上なりといへバ、伯父上にあらず、兄上なり、さにあらずや、兄上など、心なくいふかたちのいとらうたきに、親たちには、まだ歸り侍りぬともいはで、はや抱きとりぬ。まこと、一昨年の夏、歸りし折は、まだ乳にのみすがりてありしものを、いたくも生立けることよといへバ、いとうれしげにほゝゑむ。姉上今年いくつにかなり侍りしといへば、親の答をまたで、早をゆび四つさし示せり。よく肥えふとりて年よりはといふ内、はや兄上より　姉上よりも力つよしと、ほこりがにいふも中々に憎くからず。こを始にて、いかにいとなき事ありとも、兄上々々と來れど、あなたへとはいはず。そが爲に、あるは蝶を追ひ蜻蜓をとり、あるは翫物ならべなどして、大方幼子となりけれど、友を得たるがうれしさにや、晝寢さへ忘れ果てゝ、朝目覺れど、夜伏所に入るまで、我名をいはぬひまなし。寢言にまでもと、母はいひぬ。こゝに一月バかりの日も經て、今は又都へと思ひ、朝とく裝して、出立むとするに、おのれも伴ひてよ、さらずバ兄上も止り給へといふ。おのれはとかくいひこしらふれど、きかず、果は聲あげて泣くに困じて、ひそかに姉上にかたらひて、いかにもして寢させ給へといへバ、おのれに抱きてよといひてむづかるを、すかしもし、なだめもして、乳ふくめながら寢させければ、いつか眠りぬといふ。されど其ひまにといひつゝ、立よりて見れバ、笑みながら眠りぬるさ

ま、らうたしともらうたし。姉上は、今におどろきて居給はずや、いかに歎くならむ、いかに泣くならむといふ聲も早くもり給へり。さもこそ、血脈こそわかてれ、わが子ならでも、かくまで思ふものを、親にして子を思ふ闇にまどふは理なりと思へど、おのれも涙さしぐまるゝ心地するを、まぎらして急ぎ車にのれど、風の如く走りて、我家はやう〳〵、遠くなりゆけど、猶面影にたちて忘られぬは、畏し、父上にもまさず、母上にはまさず、たゞ其幼子のはゝゑむ姿のみ。さるにても、かれはいかなる事をか夢見るらむ。あはれ其幼子、

玉川の里にて　師岡須賀子

とし頃になやむあしのけ、今年は、いと重ければ、はやう、轉地の療養せよと、醫師のすゝむるに、何處かよけむ。伊香保、鹽原の温泉　さては、かまくら、江の嶋の海水浴はうるさし。さればとて、鹿野山は、海をわたらざれば行かれず。筑波山は、道さかしときけど、心すゝまず。とかうして、思ひいでゝ、昔居たりし乳母の、今、玉川にあるをたづねてものしつ。見れど、いと荒れはてゝ、軒のしのぶと、籬の竹のみ、處々がはなり。そのかみ、懐にいだかれて、根芹つみに、若鮎つりに、來し處とも思はえず、夢かとばかり、打悦びつゝ、父上、母君のこと、妹のことなど、急ぎたづぬるも、老のま心にて、かく、大人給へるものか。乳母よく〳〵と、はひまつはり給ひしも、はや、夢となりぬと、語り出でゝ、つきせず。病のため、來れ

るよし、物かたれど、聽きて、さま〴〵、いたはり慰むるなさけ、昔にもまされり。いと嬉しとて、心安くてある程、秋とはなりぬ。さばかり惱める病氣も、乳母の誠のしるしにや、起居も安く、心地、淸々しうなりぬ。あなうれし。父上、母君またせ給はん。妹も、いかに淋しからん。學校も、はや開かれぬべしなどといへど、未、またくいえ給へるにはあらず。都は、今、なほ、暑からむ。歸り給はゞ、又もや、病みたまはん。しばし止まりて、都のものがたり、聞かせたまへ。便なき老が身を、あはれと思さばなどいへば、さすがに、立も出でられぬほど、いと冷々しう、朝夕の風、身にしむばかりになりぬ。いまはなごりをしとて、何かせん。明日こそはと、行李したゝめて、ふしどに入りぬ。されど、都には、父上、母君、いかにまち給はん。片時も早く、かはらぬ御前、拜みまつらばやと思へば、心も空なれど、また、かく、まめなる乳母のなさけも、また、ふりすてがたしやなど、思ひ屈したる枕上に、ふと、聞付けたるは、衣板のおとなりけり。あはれ〳〵、いかなる人のすさびなるらむ。あるは近く、あるは遠く、風のまに〳〵、音なふがあはれさ、俊頼の朝臣の、「松風のおとだに」とよまれけん玉河の里の砧を、かう、打ちつけよきかむとは思はざりしを、あはれ、かゝる片山里に、かゝるさびしき秋のはてに、便なき老人ひとり、打ちすてゝ、いかで、立出づべきと、涙せきあへぬに、夜やふけぬらし、吹く風、いよゝ、身にしみわたりて、その音のみ、

たゞまぎれぬぞ、いと、心つくしなりや。

雜報

●御救恤　こたび、大分縣に、非常の暴風雨にて、災害ありしを、憫然に思召され、　大君皇后宮兩陛下より、御救恤金八百圓を下し賜はりしと承りぬ。

●皇后宮　には、海陸軍負傷者をあはれに思召せられ、親く繃帶を製し給ひ、廣島なる野戰衛生長官の許まで下し賜はりしと承りぬ。斯かる深き御惠を蒙るものは、孰も、感泣に堪へざるものなかりしとぞ。

●又　宮の御仁德を洩れ承るに、九重の大宮内は御手狹の事なれど　皇后宮の御散歩地等は、別に御設けもあらねば、右にては、御不都合なりとて先頃、紅葉山へ　宮の御遊歩場として庭園を新設せんと、內匠寮にては、已に、木石等の運搬に着手せし折柄　宮には、之を聞し召給ひ、今日の如き國事の穩ならざる時に遊歩場など新設に設くるは、宜からず、思ひ止るべしとの有難き御言に依り、遂に中止するに至りし由、斯く御心を惱せ給ふはいとも畏き御事なりと掛員一同は感涙に咽ひ居りといふ。

●乃木少將の北堂　赤坂新阪町に住居せらるゝ陸軍少將乃木希典氏の北堂壽子、同夫人靜子には、少將が出征留守中の家計を大に儉約して、其の剩餘の金を以て、恤兵の費に充てんとし、この頃第一旅團閣下より從軍せし陸海軍人の家族にして、不幸、又は、貧困の者を賑はさんとて金十八圓を添へ、其の取扱ひを東京府廳へ願ひ出だされしとぞ。

●愛女を看護婦となす　岩手縣東磐井郡薄衣村の齋藤時保氏といへるは、最早、六十七歳の老翁なるが、男女數人の子ありて、何れも、教育に心を用ゐ、今は、それ〴〵の職に就きて、所々に在る中に、四男郡太氏は、第二師團輜重兵大尉となり、又、五男謙吉氏は豫備陸軍下士にて、近來、家には、謙吉氏夫婦と、二人の孫あるのみなるが、翁は、昨年の春より、中風症に罹り、起居も意の如くならざるにぞ、專、謙吉氏夫婦の奉養怠りなかりしに、今回は、謙吉氏も、召集に應じて、出征せしかば、跡には、妻女一人のみとなりしにぞ、萬事、定めて困難ならんとて、東京なる高等佛和女學校の教師なりし孫女いよ子(二十)は、兄君に代りて孝養を盡くさんとて、先頃態々歸鄉せしに、翁は、元より、人に勝れし愛國家なれど、其の身の不自由は、更に意とせず、明日をも知れぬ老の身は、如何樣になるとも苦しからず、汝は、我を看護せんとの心ならば、進んで看護婦の數に應じ、國家の干城たる軍人の病者負傷者を介抱するこそ、現今の急務なれと、いと嚴格に云渡せしかば、

折しも側に居合せたる人、其の御辭は、さることなれど、國家の爲には、既に、大尉どのも、(郡太氏なり)從事せられ、謙吉氏も從軍せらるゝことなれど、せめていよ子一人は、御身の介抱をなさしめられば如何と諫めしかど、翁は、中々聞入れず、今や、軍人諸氏は、身命を擲ちて、國家の爲に盡くす折柄、安んじて、我子の介抱を受けらるべきかは、疾く／＼急げとの嚴しき辭にいよ子も、父の命をかしこみて、匆々行李を整へて、仙臺なる看護婦學校へ入學の手續を爲したりと。あはれ、この父の勇壯なる、いよ子の孝順なる、共に、芽出たきことになん。

●女生徒の敵愾心とて、此の頃、仙臺市なる或私塾を開きたる外國婦人(傳道師)が女生徒と日清戰爭を論じたる末、外國婦人は、生徒に向ひ謝罪したる話を聞けり。吾人は、女生徒の、愛國の志厚きと、勇壯なる氣象あるを喜ぶ。尚、望む所は、斯く御國を思ふ心あらむ、速に、御國の教、神の道に悖れる外教を受くることを止め、正しき御國の道德を修めまはしきことなり。其の勝敗を爭ふ辯を以て、邪教の害を論ふべきことなり。

●節婦ふさの傳

左の一篇は妾が實地につきて見聞したる一節婦の實傳にして文章いと拙くあかぬふし／＼多かれど其操行に至りては古代の烈女に對して恥ぢざるものと覺えれど貴社におくる事とはなしぬ女鑑欄内の一部を割きて天下の貴婦人令孃たちに紹介せられむことを望む

福原奥子

あはれ世はくだりにくだりて、なべての人、皆輕薄浮華の風に流れ節義貞操地を掃ひたる今日八雲立つ出雲の國なる飯石の郡三刀屋町にいともゆかしくいとも尊ぶべき一女子を得たり名はふさと呼び同じ町に細き烟りを立てつる古林茂平といふものゝ娘なりうまれつきいと淳良にしてよく父母に事へ家業をはげみ居たりしが十八といへる年樋口林四郎の許にかしづきぬ家もとより貧かりければ夫は日々魚籃をかつぎて近郷をうちめぐりふさは内にありて姑に事へかすかなる烟を立てつゝもいと睦しくゝらしけり

されど不幸にして世を譲るべき子なかりければ明治八年の頃とかや親戚より鐵市といへる七歳許なる幼子をやしなひぬかくするほどに夫林四郎はその年の末つ方よりふと神經病にかゝり家事を營むこと能はざるのみか人事を辨へずいとあら〱しき擧動さへありければふさは痛く之を憂ひ心をつくして介抱しその余暇には幼子を脊負ひつゝ魚籃をわきはさみて町内を賣りありきあるは他人の使ひなどして僅かばかりの金錢を得て糊口の資とはなせり

かゝる窮厄に陷りたれど心はえいと宜しく人によりて生活するを耻ぢおのれの力を以て一家を立てひとの志堅くもとより家に餘貲あらざるのみならず老母の孝養病夫の監護醫藥の調度幼子の養育を一身に引きうけ少しもうみ厭ふ色見えざりければ近隣の人々もこをきゝて譽めあはれまぬはなか

りき今ふさか苦心の一斑をわけむに神經病の事とて時々怒り罵りなどしてふさに向ひ屢々あらくしき擧動あるも少しも逆ふことなくよくこをなためすかしつゝもとより終日側にありて看病することは能はざるも業務の余暇には必ず歸りて之を慰め食物の炊煮は或は不在中失火のあやまちあらむことを恐れて隣家に頼みて調製し必ず自ら之をすすめおのれは粗衣粗食に甘むじて夫には暖衣美味をすゝめ力を及ばむ限りこゝろをつくして療養しひたすら夫の快復を祈りけるはあはれにもいと殊勝なることになむ

かく療養に手をつくしゝも夫の病は癒えやらずはては朝夕の烟すら立てがたかりけれど養男饑市は稍長するまゝにある家に奉公せしめ巳れは朝は未明より夜は更くるまで家業をはげみ病夫の看護に心をつくしけれど其篤行誰いふとなく遠近に傳はりて遂に縣廳に達し明治拾四年に至り左の褒狀を下し賜はりたり

飯石郡三刀屋町平民林四郎妻

古林ふさ

天保十二年八月生

其方儀素性直順夫林四郎七年以前ヨリ瘋癲病ニ罹リ人事ヲ辨セス爾來家事ア一身ニ負擔シ晝夜職業ニ勤メ夫ヲ善養スルニ至ヲザルナシ就中姑存在中ハ能ク孝養ヲ盡シ貧困ノ央飲食其嗜好ニ應シ毫モ遺憾ナカラシメタル等數年間ノ孝養間斷ナシ其篤行隣里ニ聞ユ奇特ニ付爲其賞金壹圓下賜候事

明治十四年六月十二日

島根縣

以て其操行の如何を知るに餘りあるべしろの後明

治廿年に至り復び金參圓五拾錢を下賜せられたり而して今日に至るまで二十年の久しき人事をわきまへざる病夫に事へ其貞操を破らず今なほ朝夕監護に怠りなしといふあゝかゝる片田舎に生れ無敎育なる一女子にして他人の力をからず艱苦の裡に處して其節義を守り貞操を全うしたるは實に澆季の世に得がたき婦女といふべきなりあはれ開明の世に生れ文明の敎育をうけたる婦女子たちよふさ女に對して耻づる所なきか如何に

因に云ふ發男儀市は明治廿二年輜重輸卒に徵集せられ豫備服役中なりしが這般日淸事件の起るに及び第一に徵發せられて目下渡韓服役中なりといふ

◎年栖舍　小會の分は、左の如し。

九月十八日小會

當座通題

海邊秋風

掛すてしあまり苫屋のいよすだれ
わみめに見えず秋かせのふく　井上　正直

こよろぎのいそべの松に風たちて
さびしくなりぬ秋のうなはら　水野　忠敬

おきへゆく千舟百ふねたちかくす
露ふきはらへわきのうらかせ　增山三雪子

浪間より月はのぼりていそやまに
ふくおとたかし秋のゆふかせ　大河内一子

ふきおろすいそ山風もよるなみも
秋たつけさはおとかはりけり　江刺　恒久

こよろぎの磯のもみぢを吹よせて
はや秋かせのおとのみぞする　青木　修

秋かせにうちくだけつゝ浦なみの　櫻井　倘保

はな咲そむるおきのいしかな

あまりすむ浦のとまやをもる月の
すき間さむけく秋かぜのふく　千野　眞艸

たちつゞく眞帆にみせたる百舟に
ひときやすらし秋のゆふかぜ　後藤かね子

もしほくむあまが苫屋も淋しきは
いはうつなみの秋かぜのこゑ　宮木まさ子

もしはやくあまがふせやも此頃は
ゆふべさびしく秋かぜぞふく　諏訪　晴子

今朝ははや浪の音さへ身にしみて
あきをおぼゆる袖のうらかぜ　諏訪　忠誠

よる浪に音うちそへてこよろぎの
いそべさびしく秋かぜのふく　會主諏訪　忠元

九月十八日小會

當座題

恒久甲
正直甲　諏訪　晴子

月前琴

修甲

くもりなき月影のみかかきならず
琴のしらべもすみわたりけり　水野　忠敬

濱秋風

恒久乙

秋風のさそふまに〳〵よするかな
ゆゐが濱邊にたつるしらなみ　大河内一子

虫聲非一

恒久丙

さま〴〵の虫の音すなりうるはしく
千ぐさ咲きそふ秋のはな野に　諏訪　晴子

海邊萩

修丙

夕しほのみつの濱萩おとたてゝ
風にそよくもさびしかりけり　江刺　恒久

瀧邊霧

さくなたり落くる瀧のおとのみは
へだてもあへぬ峯のあさ霧
三雪子丙　青木　修

曉　雁

薄ずみの文字なすそらの雁がねは
老のゝめゆゑかよまれざり[illegible]
正直丙　諏訪　忠元

雨後萩

雨はれし庭の萩はらわけ行けど
そでにいろある露こぼれけり
三雪子丙　諏訪　忠元

隣女郎花

中垣のくづれをもれてわが庭に
さくもなつかし女郎花かな
井上　正直

朝霧

村雀ねぐらの竹をおきいでゝ
ゐふきにちらすつゆのしら玉
同

夕雁

みだれ髪ゆふべの月のさしくしに
つらもみださずわたる雁がね
水野　忠敬

古戰場月

武士のたゝかひありし宇治がはの
おとこそてらせ秋の夜のつき
増山三雪子

波　霧

すみたつ舟はたせよと嘆すれど
朝きりふかしみえぬひとかげ
同

月契千秋

一むらの雲だになくてすみにすむ
千秋をかけてみがく月かげ
大河内一子

月前萩

てりわたる月のひかりにむら萩の
露もみかけるたまとみえける
櫻井　尚保

秋田

風そよく穂なみの稜もおだやかゝ
としある秋の田にぞみゑける
鈴木　重信

露深

わけゆかむききぬやぬれなん人招く
尾花がそでにつゆ玄げくして
同

月前笛

うき雲はいつち行けん笛の音に
ひょく\/すめる夜半の月かげ

千野　眞卿

名所秋夕

つきいだす淺草でらのかねの音も
玄づみてさびし秋のゆふぐれ
同

秋夕雨

秋ぎりのわたるゆふべにふる雨は
のきにたはしる音にこそしれ
後藤かね子

十五夜月

くもりなき秋のもなかの月きよみ
いく里びとかうちながむらむ
同

月前雁

すみまさる月のみ舟におくれじと
聲をはにかけて雁なきわたる
宮木なさ子

秋野夕

秋の野にたちいでみれバ夕露に

なくむしの音もうちしめりつゝ

同

名所虫

こゝよのみ宵になくかきり〴〵す
　秋もいつしかふかくさのさと

●諏訪神社献詠（つゞき）

河西敦那
打ちよする入江のなみに音そへて
　そよくもさびしをきのうは風

高木古道
さらでゝもすゞけさみゆる水際に
　秋のこゑなすをきのかはかせ

岩本正簡
流れゆくみづのおとさへ淋しきは
　荻のさやきにならふなるらむ

井手宗慶
わき來ぬとみきはの荻の音すなり
　波はさわかぬかせのまに〳〵

五味由作
さびしさをたれにきけとか大伴の
　みつのはまをき風さやくらむ

長谷川逸魚
心なきわまもたもとやしほるらん
　うらわさびしきをきのうは風

湯淺正伸
まのゝうらよりくる波に音そへて
　夕かせさやくきしのをきはら

宇野愼識
いつのまに秋たちぬらむたに川の
　みきはのをぎに風さわくなり

宮阪七兵衛
こく船はみづにまかせて川かせに
　荻の葉そよくおとをきくかな

楢崎庸輔
水のおもにつきもうつれり吹風に
　かけなくたきそきしのむら荻

窪田林次郎
川風のふきわたるたにすゞしきを

荻のうは葉につゆのみたるゝ
名取 厚次

さと川のきしのをぎ原おとたてゝ
そよくもさびしあきの夕風
小林 榮運

ひとむらのみぎはの荻に風みえて
波にもあきのおとそきこゆる
千野 良草

山川のたきのひゝきもおとかへて
みぎはのをぎにあき風そふく
岩本 節次

ゆく水のおとにたぐひてゆふ川の
きしにこゑあるをぎのうは風
増田 重義

さゝ波の音をも添へてさやくかな
すはの湖邊のかせのをぎはら
坂井 元藏

さら〳〵と風よりさきに音すなり
波にゆらるゝきしのをぎはら
増田 守信

すはの湖やころもかさきに音信て
あきかせたつるをぎの一むら
矢島 倘文

あきかせの吹ともなしにふへ川の
おとたてそめぬきしのむら荻
大岩 昌藏

み渡せしみたらし川にかせたちて
みぎはのをぎぞ秋をつげゝる
並木 信明

夕まぐれみぎはのをぎをふき渡る
かせの音こそさびしかりけれ
今泉 親光

いとはやも立にしあきを山かはの
みぎはの荻やひとりしるらむ
並木 信温

このゆふべ荻の上葉に吹きにけり
なみより立つるあきのはつ風
大沼 [illegible]

しげりあふ汀のをぎのひとむらに
　あきかせたちぬたもと凉しも　高橋良休

凉しくもをぎのうはかぜ音たてゝ
　みたらし川にあきをつくらむ　笹井惟善

神垣のきよくながるゝみたらしの
　そこにもなびくをぎのうは風　河野通重

夢のまになつは流れてかはつらの
　をぎの上葉にあきかせのふく　草間國次郎

池殿ののきのしたをぎふくかせに
　むすびもとめぬ秋のゆふつゆ　藤江正明

打よする波かときけた川ぎしの
　荻の葉わたるあきのはつかせ　池田正誠

松かげのうつるも清きみたらしの
　みぎはのをぎにあき風ぞふく　德山頼廣

年毎に聞くとはすれど秋といへど
　あはれ身にしむ荻のうはかぜ　縣秀益

夕まぐれ茅野のかはつら過ゆけど
　をぎの上葉にかぜわたるらん　寺村安憲

諏訪の湖の静けき波にかげみえて
　さわぎもやらぬきしのむら荻

十一月兼題

五日
　歌……天長節
　文……立冬

廿日
　歌……朝時雨
　文……文會に友を招く文

教の庭

十月廿日兼題　月前菊

天　府下本郷區淺香町　遊佐とよ子

我がやどの八重の白菊そのいろの
　ひとへは月のひかりなるらむ

地　同所　落合操子

置くつゆに空ゆく月もかげとめて
　にほひことなるしらぎくの花

人　大坂市今橋　上野雛子

さかりなる垣根の菊のつゆしろし
　月のひかりをむすびそへつゝ

青木春子

置く露に月のひかりのそへよれバ
　いよ〳〵しろししらぎくの花

（天地人のほかは原稿到着順なり）

石井德子

秋の夜よ月のひかりのきよければ
　きくのちとせの色もみゆなり

平野君子

照る月のひかりをそへて御園生に
　にほひそめたりしら菊のはな

磯部つや子

我がやどの露のまがきのしら菊は
　さやけき月ににほひ出けり

大橋廣江

小夜更けてくまなき月に一しほの
　いろ香そへたる菊のはなかな

大橋雅子

照る月のひかりも花と見まがへば
　いつらしら菊さだめかねつる

高作貞子

冬ならで月にみゆきのさゆるかと
　みえしは庭のしらぎくのはな

河野文子

月かげもよそむばかりに見ゆる哉
　つゆの玉しく白ぎくのはな

咲きまじるまがきの菊にてる月の
かげもいろ／＼匂ひぬるかな　永井さい子

我がやどの垣根の菊におくつゆは
つきのひかりに玉と見えけり　江馬　信子

照る月のひかりに色はまがへども
さかりに見ゆるにはのしら菊　西村登美子

さやかなる月の光りもそひてけり
影もたもとににほふしらぎく　濱口　直子

花の色はつきの光りにまがへども
にほひはしるし庭のしらぎく　濱口　寛子

月さゆるまがきのもとの菊のはな
ひる見しよりもうつくしき哉　神田　樂子

月かげのうつろふ色もことさらに
つゆおきそふるきくの花かな　神田　靜子

咲きそめてまた初霜もしらぎくの
いろさやかにもてらす月かな　土生　清子

秋の夜の月のひかりのきよければ
ゆきかとまがふ白ぎくのはな　高井　米子

月かげのてりそふ園のしらぎくは
ゆきにもまがふ心地こそすれ　明石　榮子

冬や來しゆきやふりしと思ふまで
つきにさえたるしらぎくの花　明石まさえ

さやかにも月こそやどれませ垣に
千秋かはらぬしらぎくのはな　諏訪　晴子

秋の夜のくまなき月やきくのはな
よはふ盛りをみんとなるらん　羽田三緒子

おき渡すつゆにやどれるおほ空の
月をかざしのしらぎくのはな　河田いし子

宿かりて花にひかりをそへてけり
うちゆく月もきくのさかりに　羽田たか子

我がにはにうゑし白ぎく露おもみ
つきさす影のたわみがちなる　竹内　淑子

さしのぼる月をやこしていち白き
ひかりありけりつゆのしら菊　瀨戸さと子

かぎりなき匂ひを月のもちそへて
盛りひさしききくのひともと　碓井　信子

置くつゆに月の光りのてりそひて
あなたぐひなのしら菊のはな　碓井　武子

秋の夜のひかりさやけき月かげに
にほひこぼるゝ白きくのはな　碓井和可子

白つゆのふかくおけれどきくの花
した葉までこそ月やどりぬれ　鈴木秋子

秋かぜもこゝろして吹け八重菊の
つゆにやどれる月やくだけん　降田槙子

夕月のかげにさき出るしらぎくの
花はくれてぞ見るべかりける　畠山千代子

月かげに匂ひもいとゞまさりけり
いまをさかりと咲けるしら菊　木村千代子

夜もすがら見よとや月の照すらん
にはもせに咲くしらぎくの花　木村八重子

露しげくおきわたしてぞしら菊の
いろもましける月のひかりに　相賀金子

澄みわたる月に匂ひもまさるめり
つゆにたわめる白きくのはな　相賀美賀子

月かげは霜かと見えてわがやどに
うつるもわかぬしらぎくの花　植木鋼子

延着

影きえし星もこゝにはのこるかと
つきかげにほふしらきくの花　師岡千代子

月影のひかりもそひてにほふかな
つゆの玉しくにはのしらきく　大橋てい子

賞めでし花はいつこともまよふまで
つきのひかりににほふしら菊　吉田芳子

久方のつきのかつらのかげさえて
いよ／＼しろししらぎくの花　野尻鶴子

千とせをも花のすがたと照る月に
うつして清ききくのひともと　馬島くに子

月影にをらんとすればちりかゝる
つゆにおどろく菊のはなひら　佐藤敬子

白菊のはなにやどれるつゆの上に
つきのひかりも照るよはかな　鳥山鶴子

月影はつゆにうつりて花のいろの
ひかりもきよくにほふしら菊　高橋政子

照る月のひかりとめしかしら菊の
こよひの色香えこそいはれぬ　山田先子

てる月は菊のまがきにさえ／＼て　山田縣子

色さへ香さへそひにけるかな

久方のつきのひかりのてりそひて
いよ／＼志ろしにはの志ら菊　藤澤もと子

隈なくそいかでわくべきてる月の
ひかりにまがふ志らぎくの花　藤澤みつお

打ち見ればしもかとばかり在明の
つきかげさゆる庭の志らぎく　堀江鈴子

月かげの霜かとみゆるあきの夜に
さやけくにほふにはの志ら菊　原りつ子

くまもなき月のひかりに志ら菊の
花もひとしほまさりがほなる　磯野玉下

時知らぬ雪のひかりと見えぬるは
まがきの菊につきのさすなり　海遊定子

袖垣のやれまもさやにしらぎくの
つゆにしば／＼みゆる月かな　太田蘭子

さらぬだに重きをきくの露の上に
空行くつきのかげやどるなり　太田さち子

さえ／＼し月の光りのてりそひて
一しほにほふきくのひとむら　川瀬繁子

月かげのひとつ／＼にてりそひて
ちゝにや匂ふ志らぎくのはな　川瀬菊子

夕月のかげもひとつにほひ出て
さかりあらそふ白ぎくのはな　佐々有瀬子

おく露にてる月かげのやどしめて
千秋をちぎるにはの志ら菊　徳永萬壽子

いづれともわけてみなまし菊の花
をるそでにほふ月のひかりに　澤田春子

咲き匂ふ志ら菊の上におくしもの
たまと見るまで月はすみけり　伊達富貴子

澄みのぼる月かげきよき庭の面に
ひともとにほふ志ら菊のはな　水谷清子

十月廿日兼題　女徳の説

地　府下小石川區水道端町　竹内淑子

女に四行あり婦とく婦言婦容婦巧これなりそが中にも婦とくもともにおもしあらはさんとしてあらはれずあらはさゝるもあらはるゝをとくといふなる凡おもひうちにあれバいろそとにあらはると

か心ざまよくしてすでにとくにかなひなば婦言婦容婦巧はさらなりおもてにあらはるゝ行ひみなとくにかなふべし徳はこゝろにそなふる善なりをみなのいそしむべき道多かれどもそのおもなるものは孝貞和順にこそあらめをみなはつねにうちにありて事をなすものにて生れながらすでに和順の性ありさるを女權擴張論者などいふものゝとくにこのみちをあやまれるが故にそのみをやぶるにいたるなりつゝしむべき事にこそ

人

岡山市十一番町　降田槇子

世には西の國の風に習ひて男女同權とか女尊男卑とかまたは女子獨立とか云ふひがごとを唱へて大御國の女をまどはし女の徳を害ふ者の多きこそいと口惜けれそもく女は陰にして男子につれて世を經べきものなれば其徳もまた自からことなれりまづ第一には和順の徳を脩め出るも入るもしとやかに何事にも和らぎてものに順はざるべからず第二には貞操の徳を備へて其操を守り第三には博愛の心もてひろく人々を愛しみ數ならぬ者にも目をかけまづしきをあはれみ老たるをいたはり幼きを助くる心ばへてこそあらまほしけれ此等の徳備りならば萬の徳はおのづから脩め得らるゝなりかほかたち美しく清らかなりとも心ばへの劣れらば如何はせん其形は深山がくれのくち木なりとも心は花になさばならざる事やあるかの兼好法師は品かたちこそ生れつきたらめ心はなどか賢より賢にうつさばうつらざらんと云はれしにあらずや遠き所も出立つ足もとよりの習なればいさゝかのわざなりとも女の徳をかゝざらんと心かけ朝夕勵みてつとめなばいつしか立まさりたる大和女となり朝日には匂ふ櫻と共に世にめでられ奥方と云はれんにも母刀自と呼ばれんにも更にはづかしき事はなかるべしげにつゝしむべきは此こゝろにこそ

相賀　金子

凡て世の中の事は言ふに易く行ふに難きものなりされどそが中に徳行ほど行ひ難きはあらずかし抑

も女徳とは何ぞ容貌の美醜をいふにあらず衣類の華美を云ふにあらずたゞ高雅の容體を作り靜淑のふるまひをなし言葉少に嫉妬の意なくはた才藝あるも色に出さずまた家の富にはこらず貧しきも天運とあきらめ堪忍もてよく働き父母舅姑によくつかへ良人をよく助け子弟を育てよく敎へ導き慈愛の情を厚うして婢僕を使ひ貧しき者をいたはりめぐみ内には家事をよく整へ外には家名を揚ずべくよく務むるを女徳とやいはん夫れ一人の徳行より一家の和樂を生じ一國の安全も亦是に基けりうべなるかな徳の行はるゝ家には貴き賤しきのけぢめなくいつも樂しき春にあひ鳥歌ひ花わらひて四時長閑なるが如し實に徳はいとたふとくめでたきものはあらざるなりさるを今の世の人たちは貴きまきしまのめでたき國ふりの敎を受けながらよきもあしきも外國の風にならはんとて富士の高根のいや高く大平洋のいや深き父母のをしへを空吹く風と聞き流し女權よ自由よと口さがなくいひはやすこそ誠に忌はしけれあはれ古しへふりの優美なる女徳を養ひてこそさく花の美しき我日のもとに生れいでしかひは有るべけれ

延　着

吉田　芳子

己か短をすてゝ人の長をとるは國民の開明に進む楷梯にして己か美徳を損ひ人の陋風にそむは國の衰ふる始めとこそはきゝつれ我國歐米各國と交を通し好を結びてより彼か長をとり我短を補ひ今日の文明をいたせりさるをなまじひに異國の言葉など學びたる女子は本邦固有の美德をすて男女同權自由結婚など口々に罵りあひはては親を敬せず夫に從はずあやしき洋服帽子など身にまとひ大道せましと歩む女子さへありいとあやしく覺えて此世の人とも見なすそも〳〵貞操從順など云ふ性質はひとり我國の婦女子のみ專有するところにして夫に事へては節義を守り舅姑に對しては順從を旨とし家政の整理より兒童の敎育にいたるまでこれを一身に引き受け夫をして聊も内顧の患なからしむるは歐米諸國の輕噪婦女子は夢想し能はざるところ

なりされど此美德を養ひ大和男子の大和魂と共に世界の上に輝かさむこと今の世に誇り女子たるものゝ尤もつとむべき事にこそ

鳥山　繼子

西洋の風俗うつり來りしより女は男よりも尊しといひさわぎしは今は一時のむかしとなりぬれど猶おのれかしこしとおもふかおほかりされどいかに男にこえて物まなびの道にはたけいかに男をしのぐばかりにものいふわざにはたくみなりといへどもおのがをさむべき裁縫の道にうとく飯かしぐわざをもしらずはなにかせん女の德は才智にあらで謙讓にこそあれされど雪のあした御前の御簾まきあげしよりも門たゝくくひなにしらぬ顏なるをこそいみじうはいひはやしける世の姉妹たちともにこの際を明めてその德行を全うし給へかし

太田さち子

貝原篤信のうしが夙に女德を女子四行の中に入れられたるはさすがによしある事にこそ女德とは如何心をへめづらかに品形くたらず人倫五常の道全くそなはれるを云ふわきて女の身一代心得置くべきは母たる道妻たる道にぞあんめるされバなにはの蘆のふしのまもわたつみのみ惡の露忘れて色かへぬ松の操のあらまほしうなん殊に今年の如き大事の起れるきはには戀しなつかしとて夫子の袖に思ひまつはるべき時かは偏へに君が御前に海山のいさをもがなと念しまつらでやは

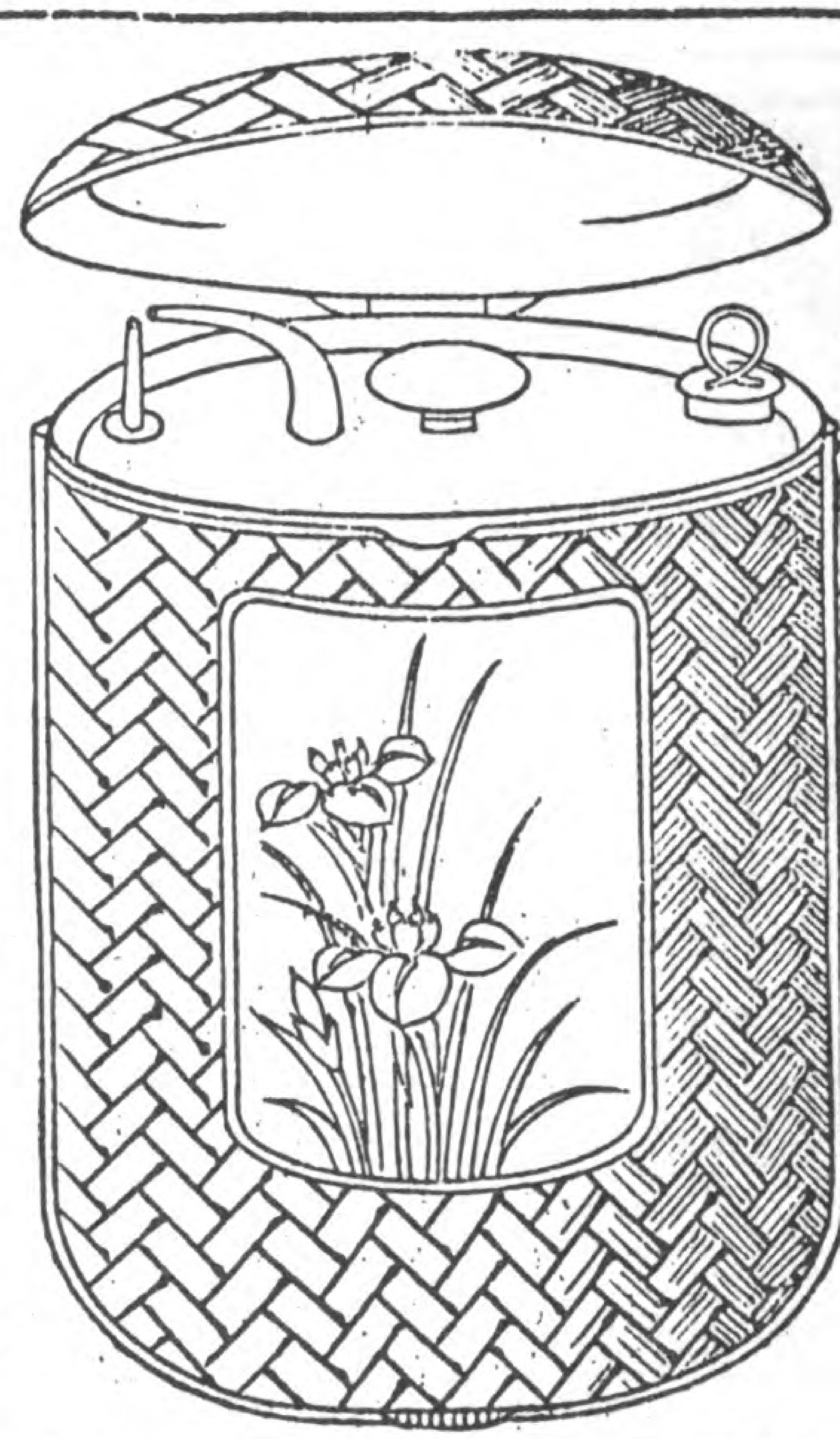
佐々有鄰子

德不孤必有鄰とから人のからさへずりならでわが皇國にはとりて以て文よむ人の掟となしぬしかはあれど神の御代より大和心といふふとくたくましきたまの御柱ありかゝるこちたき德鄰の教はたてずとも砂がすむ片山さともうまし人の在す都の市も隨在天神ちふ實の道をふみて朝にはつとめ夕にはいそしみ露バかりも惟神にそむかざるこそ女德にはありけれあなくだ〳〵しうあげつらはぬも女德の一端なりめでたく貴き國がらなれどこそ

今般弊店に於て**專賣特許**を出願中なる**懷中香水吹**器具の儀は弊店が多年實地製作に従事し幾多の經驗と工夫とを凝せしに今般漸く其整功を見るに到れり

此器具は最も輕便調法なる新奇發明品なれば装飾用は勿論紳士貴婦人方は衛生上御携帯品として片時も欠く可らざる必要品なれば何卒御試用の上如何ほど實用に適するかを御證明被成下度

近時種々の新發明新工夫の品物少しとせず然れども弊店發明の懷中香水吹の如き定價廉にして啻に香水に止まらず散布用一切に適當なるは他に此類あるを見ず之れ實に弊店獨得の發明なり今般賣擴めの爲め多年御引立を蒙りたる御花主樣へ御禮として實價にて發賣仕候間御試用の上は御朋友樣方へ御吹聽の程奉懇願候



定價

水量四十グラム入

眞鍮製　金九十五錢

洋銀製　金一圓十錢

其他金銀赤銅四分一等御好次第調進仕候

尚又弊店調進の袋物、紙入、煙草入、煙管筒、煙管、指環、帯留、その外貴金屬寶玉珍石象牙等の品々總て貴顯紳士令孃令閨方の御携帯美術装飾品は猶一層職工を勵まし其製作と彫刻を吟味致し調進仕候其品柄は堅牢優美にして坊間尋常の品とは一見雲泥の差あるは各御花主樣の疾に知らるゝ處とす且つ弊店の店則として懸直又は巧言等は不申上精々相働き正價を以て御調進申上萬事信用專一に營業仕候に付多少を問はず御用被仰付度此段併て奉願上候

袋物及貴金屬装飾品商

電話架設中

丸屋商店

東京市京橋區銀座三丁目十一番地

内務省衛生試驗所無害成績書下附　馬島直發明

登錄

商標

歌舞伎

粉

白梅（紙包　三錢

一紙函　六錢

ねり

白妙（美六錢　十錢

器十五錢　卅錢

入五十錢　一圓

水白妙壜詰十錢廿錢外に般力用も

あり（肉色）

試驗報告

東京日本橋區小網町三丁目

一番地

依賴人　馬島直

第二百七十三號

歌舞伎白粉　一種

右衛生上害否鑑定

右試驗の爲め製方書を添へ當所へ差出たる品は芳香を有する白色の粉末なり之に就て試驗を施行するに鉛等の有害物を檢出せず依て本品を化粧料として皮膚に塗敷するも衛生上無害なりとす

明治廿六年九月十五日

東京衛生試驗所

所長醫學博士　中濱東一郎（印）

試驗主任　山本正巳（印）

従來の白粉は芳香を有し乗りも能く製しあるも素鉛粉を原基とせし故其毒は自然我體の膩理より脂肪中に含める酸類に溶解け益深く吸取れ白粉焼より何時となく其鉛毒の爲め身體衰弱し終には危篤の腦症を發し鉛毒の爲非命に斃るゝ者多き事は明瞭なり故に目下衛生上の一問題なるは何人も知る所なり弊堂數年來深く心を此改良にせよせよ學理と實際とに照して特に日本藥局法規定に係る藥品のみにて**一も鉛粉を用**ひず始て前古無比の白粉を發明し既に上に掲る如き證明書を賜り積年の苦心爰に良結果を得始て世上に販賣するもの故御使用の御方は纎毒の憂なきは勿論實に**無害無毒**にして他品に優る特功あることは天折弊堂の誓て之を保證するのみならず**博士の賞賛、貴顯の禮狀**古代の沿革、俳優の死亡統計、化粧法、等皆包紙に詳記しあれど陸續御購求ありて美貌となり天壽をも全ふせられん事を

發明製造本舗　東京日本橋區小網町鎧橋際　博濟堂　**馬島直**

發賣本舗　同京橋區銀座一　電話四百七十二番　つやふきん本舗　**佐々木吉兵衛**

文部省檢定濟

副島伯爵校閲　東久世伯爵著　松本楓湖畫

尋常小學修身入門	全一册	一册	金二錢八厘
全　教師用	全一册	一册	金七錢
尋常小學修身書	全四册	每册	金七錢八厘
全　教師用	全四册	每册	金十二錢
高等小學修身書	全四册	每册	金九錢七厘
全　教師用	全四册	每册	金二十五錢
校訂 尋常小學修身書	全四册	每册 一二 / 三四	金八錢 / 金九錢
全　校訂 教師用	全四册	每册 一二 / 三四	金二十錢 / 金二十二錢
校訂 高等小學修身書	全四册	每册	金十錢
全　校訂 教師用	全四册	每册	金二十五錢
尋常 小學國史談	全二册	每册	金十錢
高等 小學國史	全三册	每册	金十九錢

發兌所

國光社

女鑑第七十二號目次

社告

○代價は郵便爲替小爲替銀行爲替及郵券にて本社へ御直接の事○郵便爲替は東京[illegible]郵便局拂渡可被下候○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收書を出さず送金は領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に郵券[illegible]御送附の事○未納後の送本は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回 發行
定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金[illegible]
[illegible]
郵税一冊一錢

明治廿七年十月廿九日印刷
同年同月三十日發行

發行兼印刷人 東京京橋區[illegible]地二丁目二十一番地 川崎直衞
編輯人 同 山根勇藏
發行所 同 國光社

(印刷所 東京國光社印刷部)